

枚方市 80 年の経験と記憶

— 香里団地という郊外空間創出とその顛末 —

野 間 晴 雄*

摘要

1947年に市制を施行した枚方市（人口40万）は大阪から20km圏の距離にある典型的な衛星都市である。戦前は広大な丘陵・台地を兵器生産工場が占有し、多くの労働者が秘匿の空間で作業に従事していた。1950年代後半、ここを日本住宅公団が大規模住宅開発を行い、「香里団地」が誕生した。そこに住むホワイトカラー層は高学歴、同年齢層の核家族である。その少数派の共働き夫婦や文化人によって、コミュニティ活動や保育所・幼稚園開設運動が展開する。市全体が人口急増による学校建設に追われるなか、香里団地を拠点とした革新・民主勢力が市政をリードし、社会教育は充実したが、行き過ぎもあった。90年後半、団地の老朽化による建替や民間への売却が行われ、新たな核家族の流入と旧来の高齢者が並存する地域社会が形成されつつある。この80年間のあゆみを著者の居住経験もまじえ描く。

キーワード：衛星都市、兵器生産、日本住宅公団、香里団地、革新・民主勢力、枚方市

私たちの香里団地は昭和三十三年（1958年）11月7日 五〇六戸（B棟一号棟～二十号棟）の最初の入居者をむかえて産声をあげました。日本住宅公団によって建設された東洋一のモデル団地です。

この団地はかつて「陸軍・東京第二造兵廠香里製造所」の跡地 今でも「陸軍用地」と刻まれた標柱が残されていますが その昔は川越地区と呼ばれたひなびた里で 竹細工の産地として知られた所でした。（中略）

昭和十三年（一九三八）暮頃から 枚方町に合併されていた川越地区香里丘陵一帯はひそかに軍需工場として買収され 太平洋戦争中の昭和十七年三月から終戦まで 一四〇ヘクタールの敷地の大工場で約五千人の人々が兵器の生産に従事していました。

昭和三十年七月 日本住宅公団が発足すると同時に 戦後十年の間 社会と隔絶されていた国有財産は 新時代の住宅団地の素地として平和の大使命をおびてよみがえりました。この間 昭和二十七年から八年にかけて 再び火薬製造工場に払い下げようとしたましたが 当時市民の激しい反対運動によって阻止され これを境に 枚方市が住宅都市として大きく発展する一步を踏み出し 今日香里ニュータウンが生まれました。（以下略）（新香里にある香里団地設立の碑）

*関西大学文学部 E-mail: noma@kansai-u.ac.jp

I はじめに一私的な記憶をまじえて

大阪府枚方市は、平成 27 (2015) 年国勢調査では、人口 404,152 人、東西約 12 km、南北約 8.7 km、面積 65.12 km²、人口順位で全国 47 番目、堂々たる中核市¹⁾である。府内では大阪市 (269,1185 人)、堺市 (839,310 人)、東大阪市 (502,784 人) について人口は第 4 位、大学こそ市内に 7 校²⁾あるが、新幹線、JR、空港ターミナルが位置する北摂・阪神間の郊外都市に比して交通アクセスの点でも淀川左岸は不利で、市の全国的認知度も低い³⁾。

1947 (昭和 22) 年 8 月 1 日、枚方町は隣接町村を併合することなく市制を施行した。ただし、本稿標題の 80 年とはその前身の枚方町が成立した 1939 (昭和 14) 年からの年数である。本稿は各種資料から枚方市 80 年間の詳細な年表を作成しつつ、当時東洋一といわれた香里団地を対象に、いかに枚方市で郊外空間が創出され、変容してきたかを考察する (第 1 図)。筆者約 50 年の

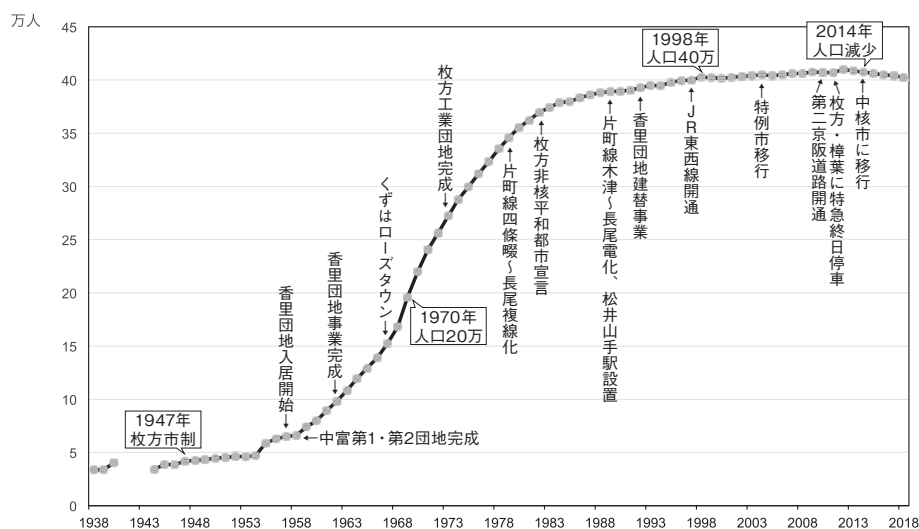


第 1 図 枚方市香里団地とその周辺
(地理院地図を基図に作成、黒線枠内が香里団地。団地内を通過するバス路線を点線で加筆)

居住経験も交え、団地住民によって形成された独特の地域社会の遺伝子が、いかに枚方市全体の性格づけに影響したかを、私がうけた学校教育の視点からも自省してみたい。

筆者が吹田市の会社借上社宅から枚方市の東香里住宅地に転居したのは1964（昭和39）年の4月、小学校5年生の時であった。転入した香里小学校⁴⁾は新築5年目の真新しい鉄筋校舎で、ここのテレビ室で東京オリンピックを観戦した。この校区には香里団地D地区のほか、公務員合同宿舍や企業の社宅、戦前開発の香里園駅北東に広がる戸建て住宅、高田の旧集落も含まれていた。当時、大阪市内の証券街・北浜に勤務していた京都市出身の父は、通勤に便利で、阪急京都線沿線よりは地価が安い京阪沿線で住宅物件を探していた。選んだのが枚方丘陵南端に新たに京阪が開発した戸建ての東香里住宅地である。香里園から2.5 km、母集落の旧川越村茄子作からも1.5 km 離れており、バスでのアクセスが必須となる。1階建ての木造または鉄筋の家屋で建物面積65～80 m²、敷地面積250～350 m²、分譲価格350～470万円代のマイホームであった⁵⁾。その後、学生時代と海外赴任を除いても、私は50年以上枚方市に住み続けている。枚方市70年の市の歴史のうち8割近い期間をここで生活したことになり、その大部分は3世代同居であった。生誕地ではないが、人口流動性が高い郊外都市に住み続け、もはや郷土に近い存在である⁶⁾。

まず、旧枚方町、枚方市のこの80年間の人口推移を年次ごとの折れ線グラフで検討する（第2図）。その起点は1938（昭和13）年にとる。この年、京街道の宿場町としての枚方町を核に、周辺の蹠跂村、川越村、山田村、殿山村（1935年に牧野村と招提村が合併して成立）、山田村、樟葉村の合併で新生の枚方町が成立する。津田町（1940年に3村合併で成立）と新生の枚方町を合わせて3.4万人弱であった。この合併は軍需工場・海軍工廠が増強・拡大された鈴鹿や豊川が1940年前後に市として成立するのと期を一にする。ただし初期人口の少ない枚方は町にとどまった。その後、1947（昭和22）年に隣接する津田町と合併して市制を施行して現市域となり、



第2図 旧枚方町・枚方市の80年間の人口推移
 （各年人の住民登録人口、『枚方市史』、『枚方町史』、各年次の『枚方市統計書』などより作成）

人口は4万人を突破する(41,887人)。

その後、5万人を突破したのは1955年である。以下、1955年から5年ごとの人口増加率(%)を示すと次のようになる。32.0(50~55年), 35.2(55~60年), 62.3(60~65年), 70.0(65~70年), 36.3(70~75年), 18.7(75~80年), 6.8(80~85年), 2.5(85~90年), 1.0(95~2000年), 0.6(00~05年), 0.7(05~10年), △0.2(10~15年)となる。1963年に10万人を突破、20万人到達が1970年である。1976年に30万人を超え、40万人の突破は1998年である。10万人から20万人到達に7年、20万人から30万人には6年と短い。1960年~70年代が枚方市の人口急増時代で、60年代が最も高い人口増加率を示す。その前後の1950年代と1970年代前半がこれに次ぐ。しかし80年代以降、人口増加速度は鈍化し、30万人から40万人まで人口が達するのに22年もかかっている。そして2014年、枚方市はついに人口減少局面に転じた。

典型的な郊外都市型の人口推移をとってきた枚方市の変容を、香里団地というまったく新しく生まれた地域とその周辺地域を対象に、次章で低地と丘陵・台地での都市化の違いから香里団地周辺を位置づけた後、戦前(1938~45年)、形成期(戦後~1980年代)、成熟期(90年代~現在)の3時期にわけて考察したい。

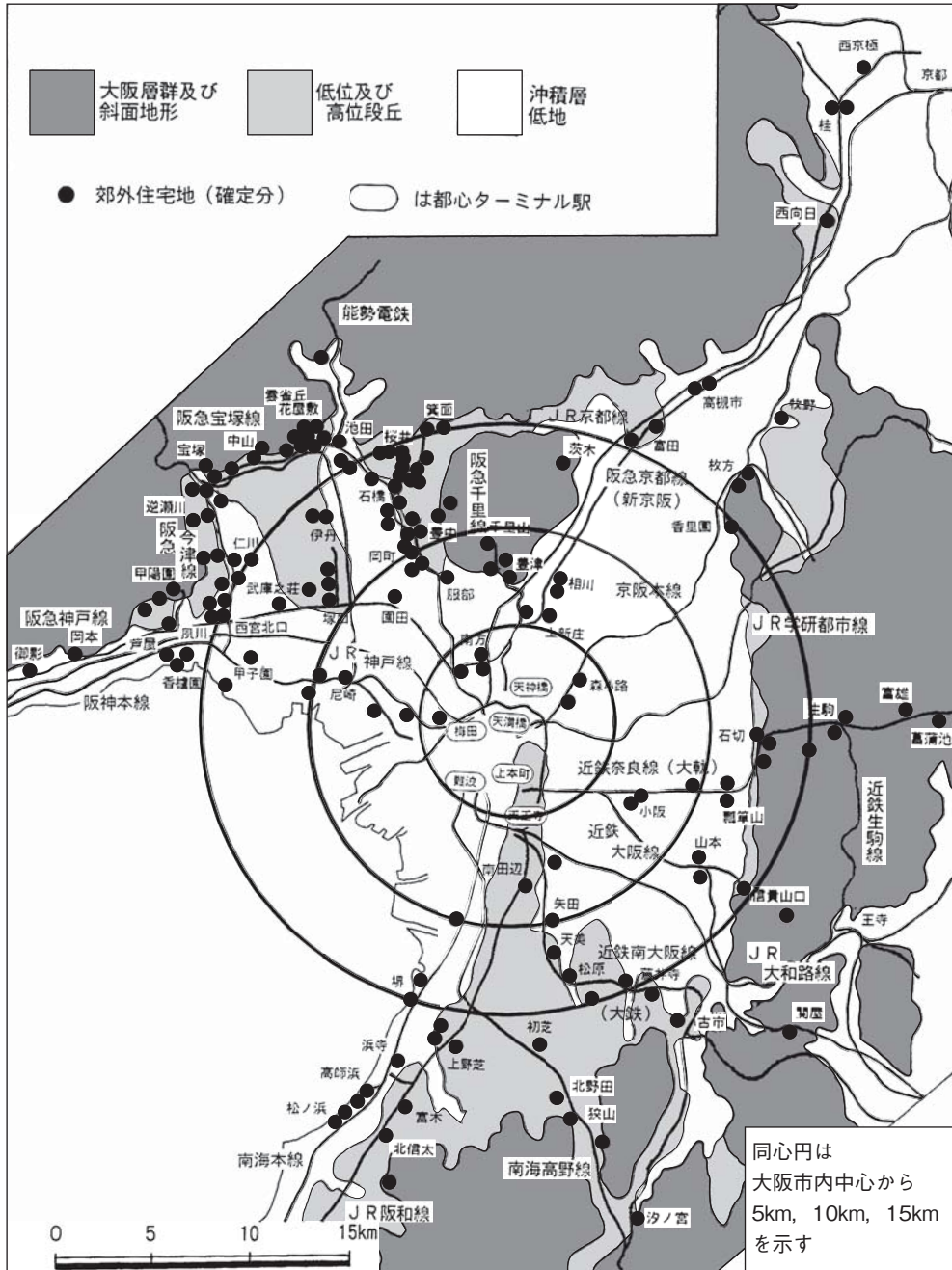
II 枚方市における2つの土地利用空間と住宅建設

枚方市の台地・丘陵部と淀川の沖積低地のあいだには、その開発史や80年間の土地利用変化に大きな違いがある。その地形境界を走る京阪電鉄に沿った都市化は、母市大阪からの20km圏にあっても戦前のごく限定的で(小林, 1954:32)、阪神間や北摂に比べるも戦前期の宅地化・郊外化は遅れた(第3図)。京阪沿線が他の私鉄沿線セクターと異なることは、10km圏では旭区の新森小路に放射状道路や公園を中心とした戸建て住宅が建設されたぐらいで、顕著な通勤者むけの戸建て住宅が建設されなかった。戦前に松下電器が門真町に移転したのも、地価が水田地帯で安く、通勤に京阪電車が利用できること、付近に労働者のための住宅が建設しやすかったことによる。守口から門真、寝屋川が大阪から10~15km圏内にありながら、京阪沿線にはこういう低湿地が連続していた。門真は1960年代に一気に宅地化がすすみ(岡部, 1979; 京都大学地理学教室, 1965)、一時期は日本一の人口増加率を示した。1960年代以降に、守口、門真、寝屋川と順次、水田の宅地化がスプロールという形で虫食い状進展した(辻, 1966; 實, 1974)。

北河内の農村は、中河内・南河内農村が綿や菜種に代表される商業的農業の発展や農村工業の集積が山間部の河内素麺以外には発展せず、長らく平凡な純農村景観を保持し、人口増加も緩慢であった。以下、市域を沖積低地、丘陵・台地における近代の土地利用空間を住宅建設と関連づけて比較してみよう。

1. 沖積低地

近世枚方の歴史的核は、東海道53次に連続して、伏見、淀、枚方、守口の4宿が設けられた



第3図 戦前における大阪の郊外住宅開発
(水内 2002 に加筆, 改変)

京街道の宿場である。京街道は淀川左岸に沿って一部には堤防（文祿堤）を利用しながら大坂に向かっていたが、伏見～大坂（天満の八軒家）は淀川水運を利用することが多く、枚方ではその中間地点の河港でもあった⁷⁾。

淀川左岸の沖積低地は多くの旧河道がみられる低湿な水田地帯で、都市化は遅れた。ただし、明治以降の本川の破堤は、明治 18 (1885) 年枚方地先での決潰以外はない。しかし、国鉄東海道線による貨物輸送にも有利であった淀川右岸と比較して、枚方市域は工場立地も遅れた。實は寝屋川市の事例から導きしだした「駅前間から順次、駅からひろがっていったわけではなく、むしろ、位置に関係なく、虫食いのな型で、水害常習地から進行していった。最初に分譲住宅、次いで業者の貸家が、それよりやや遅れて農民が建設した貸家が建てられた」(實, 1974 : 47) という知見は、枚方市域でもあてはまる。香里園駅の西の木屋(寝屋川市)から、枚方市の出口、伊加賀、磯島、渚にかけて密集した戸建て住宅やマンション、工場が混在する地域となっている。寝屋川市が 1960 年代にピークを迎えるが、枚方市域での淀川左岸低湿地の都市化は 1970 年代と 10 年以上遅れた。

2. 丘陵・台地

交野台地、枚方(香里)丘陵の標高 20~50 m の乏水性の台地・丘陵部には集落はまばらである。ため池や小河川の灌漑によってようやく水田化されたところが多い。天皇の狩猟地であり一般の立ち入りが禁止されていた禁野の範囲は、北が樟葉、南は交野市域の私部・星田、東は津田・倉治に至る旧交野郡のほぼ全域(枚方市教育委員会, 1986 : 192-193)にわたる。比較的平坦な交野台地(中位段丘)が中心で、ここには水不足を補うためのね釣瓶や個人の野井戸が数多くあった。

市域の東半分は宅地建設には良好な高燥な地形ではあるが、陸上交通機関が路線バスしかない。さらに枚方で淀川に流入する天野川を境に、その南にはより起伏の多い標高 50~80 m 前後の枚方丘陵の雑木林が広がっていた。大阪市の中心部から 20 km から 30 km 圏の枚方市は、鉄道こそ京街道に沿って早くに敷設されたが、戦前期には通勤距離の限界に位置していた。大阪からの鬼門、京都からも裏鬼門にあたるという俗説もあり、住宅開発業者もむしろこの不利を相対的な土地価格の安さとして宣伝していた。戦前期の枚方には、郊外居住者や大阪市へ通うホワイトカラーの通勤者、資産家の別荘や居宅が建設されることはほとんどなかった。唯一の例外が、香里園駅⁸⁾の東側、寝屋川市との境界の枚方丘陵(香里丘陵)に 1912 (明治 45) 年頃から徐々に建設された香里園の戸建て住宅群である(橋本, 2000 ; 和田, 1994, 5 : 同 1995 a, 2-5)。いまだ寝屋川・門真の低湿地が純農村であった時期に、それを飛び越えて市内から 15 km 圏に郊外住宅地が形成されたところに京阪沿線の特殊性がある。

Ⅲ 戦前期の枚方丘陵・交野台地の特異性—軍需工場と学校建設—

前章で見た枚方市域の台地・丘陵は、大正期に中宮に府立の精神病院が立地し、枚方公園が京阪を利用する遊園地(枚方公園, 1912 年開業。現名称はひらかたパーク、多くの遊園地が廃業するなか、わが国最古の遊園地となった)となった以外は、ほとんど都市的な土地利用はなかつ

た。ここに軍事施設の拡張・拡大が大きく関わる。

1. 陸軍禁野火薬庫と枚方火薬製造所

大阪の砲兵工廠や宇治の火薬製造所建設は日本におけるアジア大陸進出への足がかりとしての拡張であった。重量のある砲弾製造は水運や鉄道による運搬と人家から隔離された広大な用地が必須である。枚方は、旧大坂城内に設置された陸軍の火砲製造を行う大阪砲兵工廠（前身は1870年の大砲製造所、79年に改称）に近く、しかも国鉄奈良線と結びつき宇治川右岸氾濫原（木幡・五ヶ庄）に立地した宇治の火薬製造所との中間に位置していたため、日清戦争勃発後の1896（明治29）年10月には陸軍枚方製造所建設が交野台地の縁辺に決定、山林・農地を強制買収し禁野火薬庫が建設された（瀬川ほか、2013:273）。綿火薬庫、弾薬庫等の建物が20数棟建てられ、弾薬は淀川まで傾斜索道や水路で淀川に運ばれ、大阪砲兵工廠へは川船で輸送された。土地買収に際しては、清国からの戦利品を収容するので危険はないとして村民を安心させ、強制的に買収した（枚方市、1995:465）。この火薬庫が1907（明治42）年8月20日爆発した。死者こそでなかったが、家屋全半壊821戸、被災世帯4425世帯と被害は大きかった。陸軍は自然発火のため賠償責任はないという立場をとり見舞金で解決しようとした。周辺の町村長は火薬庫の移転を求めて、国や警察署に請願した（枚方市、1995:466-467）。

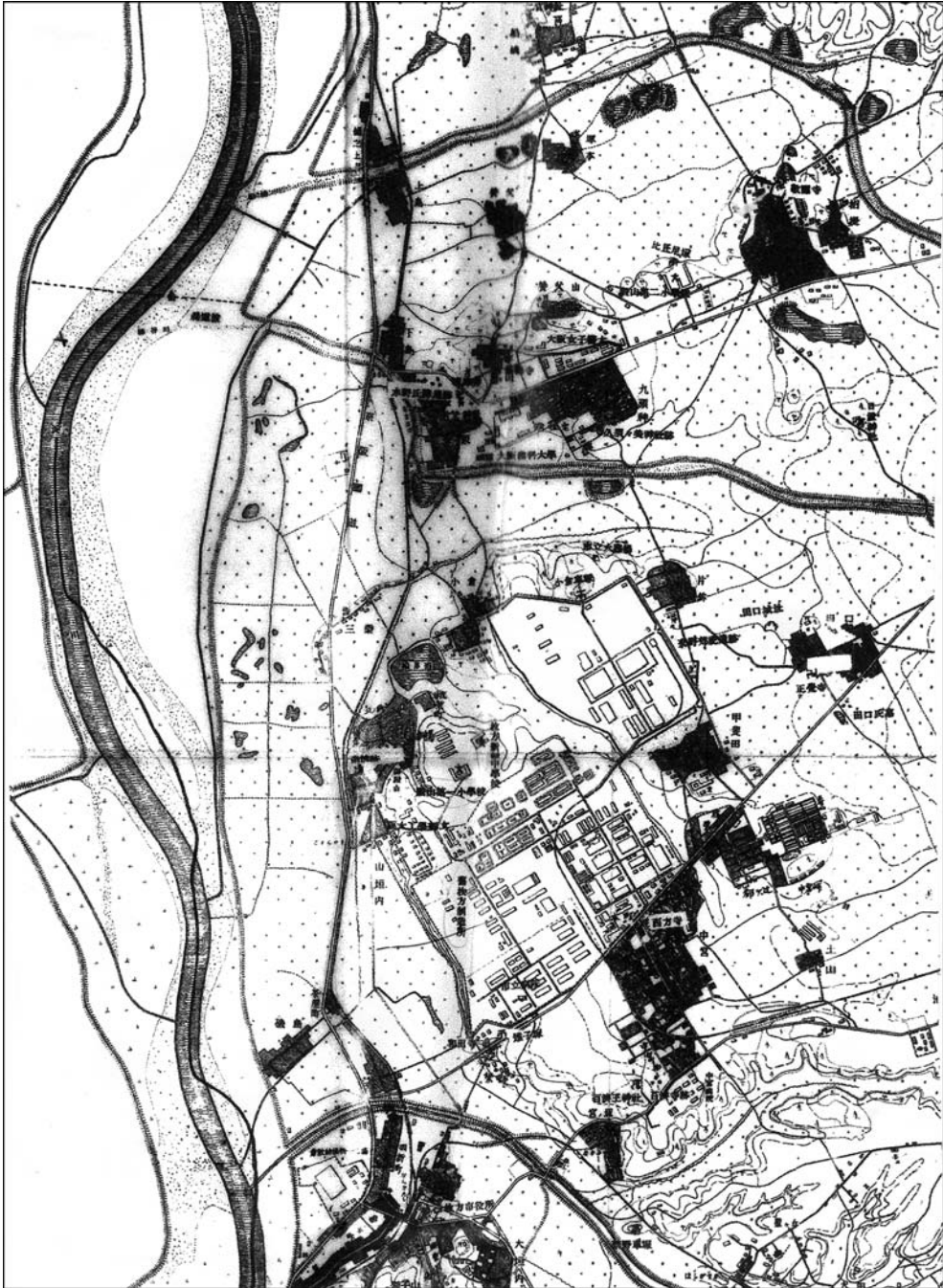
その後、日本が日中戦争への道を進むなか、陸軍造兵廠大阪工廠⁹⁾は火砲、砲弾、鉄材の3製造所から、火砲、砲弾、薬莖、素材、信管（爆弾を炸裂のため弾頭または弾底につける装置）の5部門に拡充される。1936（昭和11）年に大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫と改称、片町線の津田駅からの引き込み線が建設された。

1937年には禁野火薬庫に隣接して、中宮、甲斐田、片鉾の田畑を買収して新たに工場を建設、陸軍造兵廠大阪工廠枚方製造所が開設され、砲弾、弾薬、信管を生産した（第4図）。1940年には大阪城内にあった第2・第5製造所もこの地に移管される。枚方製造所には最大時には3万人が昼夜二交代制で作業を続け、学徒動員もされた。その工員の多くは市内在住者であった。1944年には枚方の淀川氾濫原にあった倉敷紡績も枚方製造所天野川工場として製造を開始した（第1表）。

ここで1939（昭和14）年3月1日午後2時45分、第15号倉庫で爆発事故が発生した。上海から返送されてきた重迫撃砲弾の信管（発火装置）をはずす作業中の事故で、午後7時までに29回の爆発を記録し、爆音は京阪神間に響きわたった。しかし本来はこの工場自体が国民には秘密となっていたため、8kmほど離れた^{なすづり}茄子作の住民は布団かぶって逃げまくり、「某工場火災、北河内全滅の噂」が錯綜した（櫻井、2000）¹⁰⁾。

2. 香里火薬製造所

香里製造所は1939（昭和14）年に東京第二陸軍造兵廠宇治火薬製造所香里工場として建設された。日中戦争の拡大によって、火薬の増産を迫られた陸軍は、1938年12月に軍用機での空か



第4図 旧枚方製造所付近の終戦直後の状況 (1947年)
(地理調査所1947年2.5万分の1「枚方・淀川」地形図を基図に枚方市が作成)

らの視察と現地踏査を行い、翌年1月には香里製造所の建設を決定する。140 ha の敷地に大小230棟の木造建物で、宇治製造所から送られてくる湿った状態の火薬を乾燥させて砲弾や爆弾に詰めて完成品とした。3年後には第二陸軍造兵廠香里製造所として独立する。終戦時の規模は、9

工場、工具数 9,385 人、建物面積 116,000 m² で、工具数 9,385 人、ほかに徴用工員や学徒動員で近隣の学校からも動員されたので 1 万人以上の人働いていた。とりわけ終戦までの 1 年余りは四国・北陸まで募集が行われた。彼ら彼女は製造所の周辺にあった寮（川越、桑ヶ谷、高田、菅公）¹¹などに収容、京阪も 6 万 7 千人の大輸送計画をたて（枚方市編纂委員会編、1980：724-725）、片町線星田駅からは輸送のための鉄道引込線が藤田川（現在の京阪バス車庫付近）まで敷かれた。終戦前の枚方は軍事都市としての性格を強く持ち、人口統計上の倍近い人口がこの秘匿の場所で突貫作業に従事していたのである。

上述の宇治火薬製造所に陸軍歩兵少尉として応召されたのが若き日の京都大学建築学科出身の建築家・建築学者西山卯三（1911-1994）である。1938 年 1 月技術幹部候補生として西山は陸軍火工廠に配属され、宇治火薬製造所での黄色薬（ピクリン酸）製造工場の設計と建設にあたった。その後、戦局の拡大より、西山は上司の軍人とともに香里製造所の建設計画にもかかわる。

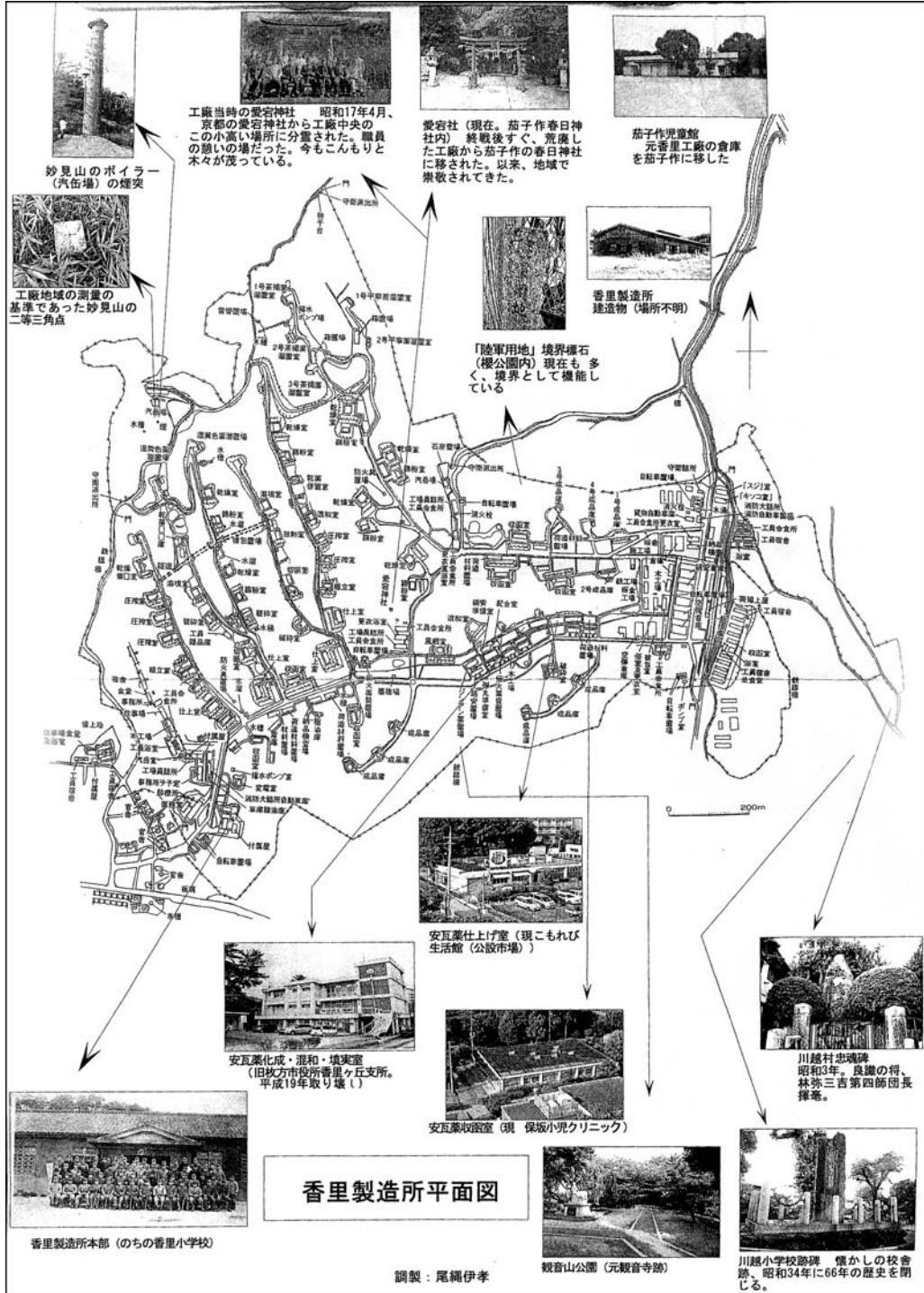
西山の自伝的著作の 1 冊『戦争と住宅』では、宇治の火薬庫の爆発や禁野火薬庫の爆発の反省点、今後の対策を詳しい観察から進言している。

北西部から北にかけて山の尾根があり、そこから南東にかけて幾条かの山と谷が並行して流れ下っている山で囲まれた地域で、外周稜線より 2 m ほど外側へ下がった所までの約 42 万坪の地域が買収予定地とされた。

敷地内を走る丘陵の尾根の間隔は約 150 m、尾根の高さは 15~20 m、谷間に工場の列を配置するのに丁度よい。丘陵が天然の防護土塁の代わりをしてくれる。それぞれの谷が作業工程の一ラインを形成する。外周部を形作る尾根の上に原料を搬入の周遊道路を設け、そこから谷の一番奥につくられる半地下の一時貯蔵用格納庫に原料爆薬を入れ、仕事を下流の方へ流す。各々の谷は、爆薬の種類によって、「茶褐谷」とか「平寧谷」とかの一つのラインを形づくるが、平行する谷間の中間に各谷を連絡するトンネルを設け、事故がおきてどこかで作業が出来なくなっても、随時その流れを切り替えて支障のないようにする。最後の谷幅が大きくなって合流する所に土塁に設けて製品の集積場をつくる。丁度東西方向になっている末端の平地の東端に片町線の星田駅から引き込み線を敷設し、製品を鉄道で搬出する（西山、1983：545-546）。

第 5 図は茄子作在住の尾繩伊孝氏が西山卯三文庫所蔵の資料などをもとに、森井貞雄（2007）なども参考にして聞き取りや各種図面から復元した香里製造所の平面図である。西山の記述が手取るようにわかるたいへんな労作である。丘陵の樹枝状の谷筋の高い部分乾燥室から順次圧搾、仕上げなどの工程を経て、現在の新香里幹線道路がはしる谷筋の棟で収監していた。藤田川付近には木工場や火薬、空弾倉庫などがあり、ここで充填され鉄道で星田駅へ運ばれた。

わが母校、香里小学校はこの製造所の本部や病院・事務所（枚方市企画部、1987：197）があった場所で、付近には幹部の住宅とされる官舎や医務室、診療所、食堂、浴室などもあった。筆



第5図 香里製造所平面図 (尾縄伊孝原図)

者が転校してきたときに感じた緑の多い、公立小学校としては広大な運動場は、このような戦争末期の突貫工事での一大火薬製造所コンプレックスの一部であった。煙突山とわれわれが呼んでいた西北の最高地点に近い妙見山の煙突は火薬製造のボイラー（汽罐場）であった。第 5 図に自転車置き場があり、この製造所内の移動や近隣集落からの通いにも自転車が利用されたと推定される。

筆者の母校でもある枚方第二中学校の履歴も面白い。1951（昭和 26）年開校の市内で二番目の新制中学である。ちなみに第一中学校は禁野火薬庫に隣接した殿山第一小学校に隣接した台地上にある。新制中学は全国どこでも建設用地が大きな問題となるが、枚方の場合はいずれも軍用地の跡地利用である。通学者の利便より、用地の確保が優先された。そのため、通学生徒は徒歩または電車利用での遠距離通学を余儀なくされた。私自身も片道 30 分の徒歩通学をした。当時は自転車利用が認められず、雨の日以外はバス利用も許されなかった。入学当初の木造校舎は卒業時には鉄筋 3 階建ての校舎に建替られたが、この木造校舎こそが第 5 図で借上地となっている製造所に隣接した工具宿舎であった。

第 1 表 香里団地をその周辺を中心とした枚方市 80 年の詳細年表

| 年 (和暦) | 枚方市に関する事項 (太字は香里団地関連、斜字は枚方市周辺地域の事項) | 日本、京阪神大都市圏の事項 主要都市・住宅関連法など |
|----------------|---|--|
| 1938 (S 13) | 枚方町と殿山町、蹉陀村、川越村、山田村、樟葉村が合併して枚方町となる／陸軍枚方製造所を禁野火薬庫に隣接して建設、生産開始／信貴生駒電鉄星ヶ丘駅設置 | 国家総動員法公布 |
| 1939 (S 14) | 禁野火薬庫爆発／宇治火薬製造所香里工場建設開始 | 第二次世界大戦勃発／米穀配給統制法／家格統制令／磐船村と交野村が合併して交野町となる |
| 1940 (S 15) | 津田村、氷室村、菅原村の合併で津田町となる／交野電気鉄道の中宮駅（現宮之阪駅）設置 | 大政翼賛会発足 |
| 1941 (S 16) | | 国民学校令／旧制の大阪市立中学校（市で初）が大阪市内に開校 |
| 1942 (S 17) | 陸軍香里製造所開設／大阪第 1 陸軍共済病院建設着工（国家公務員共済組合連合会枚方公済病院の前身）／北河内地方事務所発足 | 太平洋戦争始まる |
| 1943 (S 18) | 大阪市立中学が中振に移転 | 都市疎開実施要項決定／阪神急行電鉄と京阪が合併し、京阪神急行電鉄成立 |
| 1944 (S 19) | 戦況悪化により枚方の菊人形展以後中止／倉敷紡績が枚方製造所天野川工場として貸与 | 学徒集団疎開／学徒勤労動員法／台湾・朝鮮に徴兵制 |
| 1945 (S 20) | 枚方空襲被害 | 第二次世界大戦終結／GHQ 占領 |
| 1946 (S 21) | 枚方町立香里国民学校として開設（香里小学校の前身）／菊人形、千里遊園で復活／1922 年創業の蝶矢シャツ工場再開／大阪大学工学部枚方学舎が枚方製造所跡に建設 | 天皇人間宣言 |
| 1947 (S 22) | 枚方市市制施行（枚方町が昇格）人口 4 万人／枚方町立中学校開校／市制施行で枚方市立香里小学校に改称／政府職員共済組合連合会長尾病院設立／聖母女学院中学校発足 | 日本国憲法発布／地方自治法発布／農地改革／教育基本法（6・3 制） |
| 1948 (S 23) | 枚方市警察／枚方・津田・交野・寝屋川の 1 市 3 町で消防組合結成／旧陸軍造兵廠跡に税務大学校大阪研修所建設 | 教育委員会法公布／極東軍事裁判 |

| | | |
|----------------|---|--|
| 1949 (S 24) | 公設市場再開 (東口公設市場) / 枚方公園再開, 菊人形復活 / 枚方東口駅が枚方市駅に改称 | 社会教育法公布 / 1ドル360円単一為替レート / 中華人民共和国成立 |
| 1950 (S 25) | 枚方市民病院の前身が中宮に開院 / 片町線四條畷～長尾電化 / 香里団地の都市計画道路決定 | 朝鮮戦争による特需 / 警察予備隊設置 / 住宅金融公庫法 |
| 1951 (S 26) | 旧『枚方市史』刊行, 市立第二中学校が香里団地に隣接して開校 | サンフランシスコ講和条約 (主権回復) / 公営住宅法 |
| 1952 (S 27) | 旧陸軍大阪造兵廠枚方製造所, 小松製作所に払い下げ / 枚方事件が発生 / 市議会が旧陸軍枚方製造所・香里製造所転用再開, 火薬製造反対決議 / 百濟寺跡特別史跡に指定 | 朝鮮休戦協定 / 防衛庁・自衛隊発足 / 日米安全保障条約発効 |
| 1953 (S 28) | 香里火薬製造所問題衆議院通算委員視察, 市民4千人反対デモ / 香里園～津田京阪バス開通 / 旧香里製造所の再開中止決定 | 南山城水害 / 民間テレビ放送開始 / 町村合併促進法公布 |
| 1954 (S 29) | 京阪電車がテレビカー設置 / 東香里病院が結核病棟として開設* | 土地区画整理法公布 / 鳥飼大橋完成 |
| 1955 (S 30) | 枚方市と津田町が合併し現市域確定 / 香里火薬製造所跡に日本住宅公団の住宅誘置決定 | 日本住宅公団設立 / 首都圏整備法 / 原水爆禁止日本協議会 (原水禁) が共産党主導で結成 |
| 1956 (S 31) | 枚方市が財政再建団体となる / 中宮第1・第2団地完成 / 京都大学西山卯三研究室が香里団地基本設計を提案 / 香里団地造成開始 | 日本の国連加盟承認 / 日ソ国交回復 / 堺市金岡団地入居開始 / 教育委員の任命制 |
| 1957 (S 32) | 枚方市工場誘致条例制定 / 樟葉パブリックゴルフコースが淀川河川敷に開場 / 香里団地起工式 | ソ連再開発の人工衛星打ち上げ成功 |
| 1958 (S 33) | 中宮第1団地, 中宮第2団地完成 / 『つづり方兄弟』刊行と香里団地での映画ロケ* / 桜新地 (遊郭) の協同組合解散, 転業 / 香里団地起工式, 第一次入居募集開始 / 開成小学校開校, 川越小学校廃校 / 枚方バイパス着工 (国道1号線) / 枚方市教組の勤評闘争 / 枚方市役所香里ヶ丘支所開所 / 香里ヶ丘公設市場開設 / 香里ヶ丘診療所開設 | 大阪府人口500万人突破 / 大阪府企業局による千里ニュータウン開発決定 / 売春防止法実施 |
| 1959 (S 34) | 枚方市が原水協加入, 原水禁枚方市協議会結成 / 交野町星田が関西研究用原子炉の第3候補地となり反対運動 / 税務大学校大阪研修所が住宅公団との建築交換で香里ヶ丘11丁目に移転 / 有沢第2病院開設 (現在の香里ヶ丘有恵会病院) / 枚方国際・枚方カントリーの2ゴルフ場開設 | 岩戸景気 / 三池争議 |
| 1960 (S 35) | 市役所新庁舎竣工 / 集中豪雨で市役所付近冠水 / 啓光学園高校設立 / 「香里住宅団地計画」が日本都市計画学会石川賞計画設計部門受賞 / 大丸ピーコック香里店開店 / 香里ヶ丘文化会議が結成 / 香里文化会議の「香里めざまし新聞」発刊 (～1971), 香里団地保育所設立の契機となる | 日米新安保条約発効 / 安保闘争 |
| 1961 (S 36) | 中宮団地で枚方活動者会議結成 / 香里団地内生活問題研究会, 青空市場を開く / 香里ヶ丘郵便局開局 / 香里ヶ丘六丁目に以楽公園完成 (重森三玲作庭の池泉回遊式庭園) / 第二中学から団地内に第四中学分離 | 農業基本法成立 / 千里ニュータウン起工 (1160 ha, 計画人口15万人) |
| 1962 (S 37) | 香里団地完成 / 第四中学校開校・五常小学校開校 / 米国口バート・ケネディ司法長官夫妻が香里団地視察 / 枚方市立香里団地保育所開設 / 交通安全都市宣言 / 枚方市中小企業団地 (現・枚方企業団地) 完成 / 枚方家具団地完成 | ソ連初の人工衛星船 / 新産業都市建設法公布 / 千里ニュータウン入居開始 |
| 1963 (S 38) | 人口が10万人を超える / 府立枚方高校開校 / 国道170号が制定 / 京阪が天満橋～淀屋橋の地下線延長 / 枚方市駅北口整備 / 菊ヶ丘に松下電器工学院竣工 / 香里園駅の橋上駅舎化 / 大阪広域水道企業団の村野浄水場竣工 / 枚方テーゼ表明 | 新産業都市・工業整備特別地域指定 / 新住宅市街地開発法 (ニュータウン法) 成立 / 近畿圏整備法公布 / 全国標準設計 (賃貸) |

枚方市 80 年の経験と記憶（野間）

| | | |
|----------------|--|--|
| 1964 (S 39) | 中小企業団地起工式 | 東京オリンピック開催／東海道新幹線／ 名神高速道路開通／公明党結成 |
| 1965 (S 40) | 市が開発指導要綱作成／既製服団地完成／枚方駅前デパート開業／『枚方市史』編纂事業開始／枚方市民会館開館／ 新香里病院完成 | 住宅地造成事業法制定／名神高速道路全通／テラスハウス採用／大阪府企業局による泉北ニュータウン着工（1557 ha, 計画 18 万人）／原水爆禁止日本国民会議（社会党系）結成／米国北爆開始 |
| 1966 (S 41) | 国道 1 号線（枚方バイパス）全面開通／春日小学校開校* ／ジャン＝ポール・サルトルとシモーン・ド・ボヴォワールが香里団地居住の多田道太郎宅を来訪／団地内に幼稚園開設運動 | 全国標準設計（分譲）、東京都、日本住宅公団、東京都住宅公社による多摩ニュータウン着工（計画人口 30 万人, 2884 ha） |
| 1967 (S 42) | 市の花「菖」、市旗制定／市長選で社共統一の革新市政誕生／くずはローズタウン造成開始／穂谷に大阪畜産農業協同組合の畜産団地完成／香里団地高層棟 D 50 棟完成（エレベータ付き 10 階建）／市立香里幼稚園開園 | 泉北ニュータウン入居開始 美濃部亮吉が社共推薦で東京都知事に当選、「革新自治体の時代」始まる |
| 1968 (S 43) | くずはローズタウン分譲開始／三越枚方店開店／百済寺が国特別史跡（国内初の史跡公園）／新枚方大橋完成／官公庁団地構想発表／日本初の郊外型大型商業施設ダイエー香里店開業（2005 年閉店） | 都市計画法／高蔵寺ニュータウン入居開始 |
| 1969 (S 44) | 長崎屋枚方店開店（2001 年閉店）／府営村野団地建設／枚方病児保育室を香里団地内に開設 | 都市再開発法／東名高速道路全通 東大安田講堂に機動隊出動 |
| 1970 (S 45) | 人口 20 万人を超える／国道 307 号（枚方～彦根）が制定 ／穂谷地区に野外活動センター開設／小松製作所・小松化成に対して中宮公害対策連合会結成 | 大坂万国博覧会／千里ニュータウン事業終了／公明党と創価学会の政教分離／よど号事件 |
| 1971 (S 46) | 枚方市民憲章制定／市民会館大ホール完成／京阪樟葉駅移転、京阪初の自動改札機使用開始／枚方市駅前再開発事業施工／香里ヶ丘 11 丁目に市立香陽小学校開校* | 沖縄返還協定調印／大阪府知事に黒田了一、都知事に美濃部亮吉が当選、革新系知事が全国で 7 人となる |
| 1972 (S 47) | くずはモール街開業／枚方市文化財協会設立／府下で最初の公害防止条例施行／片町線貨物の蒸気機関車全廃／男山団地完成（八幡市） | 日中国交回復／札幌冬季オリンピック／沖縄本土復帰／沖縄県復活／田中角栄首相に／連合赤軍事件 |
| 1973 (S 48) | 枚方工業団地完成／枚方市図書館発足／府立長尾高校開校 ／枚方市駅西側の岡本町再開発計画 | 第一次石油ショック／第一次マンションブーム |
| 1974 (S 49) | 香里ヶ丘図書館開設／樟葉駅前に松阪屋進出／枚方市官公庁団地（駅前再開発）への移転開始／王仁公園が都市公園に | |
| 1975 (S 50) | 枚方駅前再開発事業（ひらかたサンプラザ）完成／近鉄百貨店枚方店開店（2012 年閉店）／枚方市黒い霧事件 | ベトナム戦争終結／沖縄海洋博 |
| 1976 (S 51) | 人口が 30 万人を超える／第 1 回ひらかた祭り／くらわんか花火大会開催（2003 年夏まで）／府立牧野高校開校／建設省淀川資料館開設 | ロッキード献金件、美濃部亮吉東京都知事に選出 |
| 1977 (S 52) | 枚方市総合計画で人口抑制、「住宅機能を重点とした多機能都市へ」へ転換／香里団地から 1 km 東の天野川右岸に UR 釈尊寺団地完成*／団地完成により川越小学校が春日小学校より分離開校* | 大学入試センター発足 国立民族学博物館一般公開 |
| 1978 (S 53) | 東香里中学校開校（第二中学からの分離）*／交野市私市に「府民の森」開園 | 標準設計の廃止し、個別設計メニュー方式へ／東京国際空港（成田空港）開港／日中平和条約締結 |
| 1979 (S 54) | 片町線四條畷～長尾間複線化完成／藤阪駅設置 府立枚方西校開校／香里ヶ丘図書館開館 | 第二次石油ショック／大阪府黒田了一知事敗北、革新市政終わる |
| 1980 (S 55) | 中学生徒 5 人による京阪電車置石脱線事故／枚方駅サンプラザ 3 号館に市民ギャラリー開設 | |

| | | |
|----------------|--|--|
| 1981 (S 56) | 枚方市における高校の「地元集中」問題、批判される | 住宅・都市整備公団設立 |
| 1982 (S 57) | 府内初の非核平和都市宣言／楠葉公民館閉館（枚方で最初）／小学校児童数4.5万人とピークを迎える／東香里小学校開校*／関西創価小学校開校 | 木質地区総合整備事業 |
| 1983 (S 58) | 総合体育館開館／枚方市駅前のサンプラザ市民センター開設／府立磯島高校開校、東海大学付属仰星高校開校／淀川左岸流域下水道処理場完成 | 泉北ニュータウン事業終了／港北ニュータウン入居開始／東京ディズニーランド開園 |
| 1984 (S 59) | 枚方八景制定／関西外国語短期大学穂谷校開校／開発指導要綱全面改正による強化／旧田中铸物民俗資料館が王仁公園に開館／「枚方市における社会教育施設の配置計画のあり方について」を諮問 | 総務庁発足 |
| 1985 (S 60) | 府道交野寝屋川線開通／枚方市第3次総合計画 | 男女雇用機会均等法公布 |
| 1986 (S 61) | 『枚方市史』全12巻完結／蹠跣公民館開館 府立枚方津田高校開校 | 日本住宅・都市整備公団による建替事業開始／関西文化学術研究都市機構設立 |
| 1987 (S 62) | 市民の森（鏡伝池緑地）、御殿山美術センター、教育文化センター開館 | 国鉄民営化／バブル景気／関西文化学術都市建設促進法施行 |
| 1988 (S 63) | 大阪国際大学が杉に開校／枚方市岡本町の市街地再開発ビル建設／片町線に学研都市線の愛称／「香里団地の並木」が枚方八景に選定／牧野公民館開館 | 消費税導入／JR片町線の愛称・学研都市線／リクルート疑惑表面化 |
| 1989 (H 1) | 平和の日制定（禁野火薬庫爆発50周年）／京阪ケーブルテレビジョン放送開始／片町線長尾～木津電化、松井山手駅開業 | 消費税導入／ベルリンの壁崩壊 |
| 1990 (H 2) | 枚方駅前岡本町再開発ビル「ビオルネ」完成／陸上競技場開場／津田のイオン工学センター開設／津田公民館開館 | 大阪花の万国博覧会（鶴見区）／バブル景気頂点に |
| 1991 (H 3) | 中宮平和ロード開通 | ソ連崩壊／バブル崩壊／ウォーターゲート事件 |
| 1992 (H 4) | 香里団地再生グランドプラン策定、建替事業開始／京阪交野線複線化完成 | 就職氷河期（～2005） |
| 1993 (H 5) | 枚方駅高架工事完成／香里こもれび水路完成／長尾病院が京阪奈病院に改称／人権宣言都市宣言 | 〈インターネット利用拡大〉 |
| 1994 (H 6) | 枚方ステーションモール（京阪百貨店、京阪ザ・ストア）完成／健康・福祉推進都市宣言 | 関西国際空港開港 |
| 1995 (H 7) | 津田サイエンスコア開所ひらかたパーク改装完成／中司宏市政発足、革新市政終わる | 阪神淡路大震災（M7.3）／地下鉄サリン事件／耐震改修促進法 |
| 1996 (H 8) | 倉敷紡績枚方工場が徳島市に移転／20年続いた高校受験地元集中の廃止を市教育長が宣言 | 小選挙区比例代表並立制採用 |
| 1997 (H 9) | FMひらかた開局／菅原公民館開館 | 消費税3%から5%へ増税／JR東西線開通 |
| 1998 (H 10) | 人口40万人を超える／市内全域で高度処理水の供給開始／総合福祉会館ラポールひらかた開館／香里ヶ丘みずき街（旧A地区）入居開始 | |
| 1999 (H 11) | 学園都市ひらかた推進協議会設立 | 都市基盤整備公団設立 |
| 2000 (H 12) | 枚方市立村野小学校の開校* | 介護保険制度開始 |

枚方市 80 年の経験と記憶（野間）

| | | |
|----------------|---|---|
| 2001 (H 13) | 特例市移行／枚方宿鍵屋資料館オープン／関西外国語大学がキャンパス移転に伴い、旧キャンパスの図書館棟を市に寄贈／長崎屋枚方店閉店／香里ヶ丘けやき東街（旧 B 地区）入居開始 | テロ対策特別措置法成立／9.11 同時多発テロ／アフガニスタン戦争 |
| 2002 (H 14) | 子供の居場所作りとして「ふれあいフリースクエア」がスタート | 学校週 5 日制／マンションの建替え等の円滑化に関する法律改正 |
| 2003 (H 15) | 京阪の枚方市駅・樟葉駅に平日昼間、土・休日終日特急停車／第二京阪道路部分開通、枚方東 IC 使用開始／香里下水処理場跡に枚方市立南部市民センター（現・南部生涯学習市民センター）開設／新香里・京阪奈両病院統合 | 平成の大合併／イラク戦争／千里ニュータウン再生ビジョン |
| 2004 (H 16) | CHOYA 枚方工場（蝶々）東大阪市に移転 | 都市再生機構（UR）設立／景観法／国立大学法人スタート／裁判員制度 |
| 2005 (H 17) | 関西外国語大学片鉾学舎跡に生涯学習兼地域交流施設「輝きプラザきらら」、中央図書館開館／ひらかた大菊人形展閉幕／くずはモール街が KUZUHA MALL に全面改装／三越枚方店閉店 | JR 福知山線脱線事故／個人情報保護法施行／郵政民営化／日本の人口減少に転じる／昭和ブーム（ALWAYS 3 丁目の夕日） |
| 2006 (H 18) | 関西医科大学附属枚方病院開院／車塚公園オープン／津田サイエンスヒルズ開所／香里ヶ丘さくらぎ街（旧 C 地区）入居開始／新香里分院閉鎖、民間住宅地に／公民館を廃して生涯学習市民センターに再編 | 住生活基本法施行／改正教育基本法／多摩ニュータウン事業終了 |
| 2007 (H 19) | 中司宏市長が談合疑惑で逮捕、失職 | 防衛庁が防衛省に昇格 |
| 2008 (H 20) | 枚方市立の火葬場やすらぎの杜（枚方市車塚）建設／万代香里ヶ丘店移転開店（旧こもれび生活館、旧香里ヶ丘公設市場）／国家公務員共済組合連合会枚方公済病院に改称 | 世界金融危機（リーマンショック）／洞爺湖サミット／京阪中之島線開業 |
| 2009 (H 21) | 穂谷地区が「日本の里 100 選」に選定／ピーコックスストア隣接地に新築移転 | 裁判員制度 |
| 2010 (H 22) | 第二京阪道路全通（巨椋～門真）／全市立小中学校にエアコン、学内 LAN 設置 | 日本年金機構発足／介護保険制度 |
| 2011 (H 23) | 特急が枚方市、樟葉駅に終日停車 | 東日本大震災（M 9.0）／大阪府市長選、大阪維新の会躍進 |
| 2012 (H 24) | 牧野駅前広場／交野警察署開所／ひらかた近鉄百貨店閉店 | アメリカ同時多発テロ事件／東京スカイツリー開業 |
| 2013 (H 25) | 関西医科大学附属枚方病院隣接地に守口市から関西医科大学が移転 | 2020 年の東京オリンピック決定 |
| 2014 (H 26) | 中核市へ移行／中宮の市立ひらかた病院開院 | 消費税 8% に／あべのハルカス完成 |
| 2015 (H 27) | 枚方市東部スタジアムオープン | マイナンバー制度スタート／インバウンドブーム |
| 2016 (H 28) | 保育所 6 年ぶりに待機児童ゼロを達成／近鉄百貨店跡地に枚方 T-SITE 開業 | 熊本地震（M 7.3）／伊勢志摩サミット |
| 2017 (H 29) | 天満橋・八軒家浜と枚方を結ぶ舟運「淀川浪漫紀行」の季節運航開始／枚方宿くらわんか五六市開催 | 天皇陛下 2019 年退位日決定／京阪特急プレミアムカー、ライナー運行 |
| 2018 (H 30) | 大阪府北部地震で大きな被害／香里ヶ丘有恵会病院が香里ヶ丘 5 丁目に移転新築 | 大阪府北部地震／9 月豪雨で関西空港水没／東京築地市場廃止 |

（資料）枚方市史編纂委員会編（1995；2014）、枚方市市民情報課（1998）、増永（2012）、中島三佳監修（2017）、諸田（1991）、岡田（2016）、吹田市立博物館ほか（2018）ほか各種資料より筆者作成。

（注）*は香里団地周辺の事項。

3. 学校の誘致

地域人口を増やすための手段として、通学区域が広い中等学校・専門学校・大学を誘致することは、戦前から大都市郊外で行われてきた。東京西郊では西武鉄道につながる箱根土地株式会社が国立・小平・大泉学園くにたちに關東大震災後に学園都市建設を試みる（片木編，2017：54-59）。枚方の場合、1927年の金融恐慌以降に京阪の所有地の地価が低迷しその処分のため、廉価での学校を誘致し、土地の大量売却、無償貸与、無償寄付によって、開校後も一時的な欠損がとも、その後の運賃収入によって相殺され（籠谷，1978：92）、さらに電気供給による収入も期待できた¹²⁾。以下に主要なものを掲げる。このほか画家の矢野橋村によって大阪市内に設立された大阪美術学校が1929年に京阪の御殿山駅に移転している。

1) 大阪女子高等医学専門学校（現在の関西医科大学）

1928（昭和3）年、大阪女子高等医学専門学校（大阪女子医専）が枚方市牧野地区に開設される。東京の2つの女子医専に続く日本で3番目、西日本唯一の女子の医学教育機関となる。1960年守口市に滝井病院（現在の総合医療センター）が竣工すると、専門課程と大学本部が守口市に移転し、教養部のみが牧野キャンパスに残る。2013年には北河内の拠点病院として、枚方市に開業した附属枚方病院（現在の附属病院）に隣接して新キャンパスが建設された¹³⁾。

2) 大阪歯科医学専門学校（現在の大阪歯科大学）

1911（明治44）年、西日本初の歯科医師養成機関として大阪市野田に設立された大阪歯科医学校が1917年大阪歯科医学専門学校に改称し、1928（昭和3）年に京阪の土地寄付によって、牧野村阪の大阪女子高等医学専門学校と道を隔てた向かいに新校舎を建設した。戦後1952年に新制大学となり、1961年に天満橋の本館完成後は進学課程用の枚方分校となる。1997（平成9）年、京阪樟葉駅前に近い地に楠葉新学舎を建設しそこが本部となる。牧野学舎は現在、歯学部1～4回生、天満橋学舎天満橋学舎が歯学部5～6回生と保健学部の所在地となっている。開校当初、いずれの学校も生徒数は600人前後であったが、通学という人口流動を発生させたことは間違いない。

3) 大阪市立中学校（現在の大阪市立高等学校）

大阪府知事の菊池侃二が1900年に打ち出した「大阪府教育十カ年計画」によって、中学校・女学校などの普通教育学校は大阪府が、工業学校、商業学校などの実業教育学校は大阪市が中心に設置するという「棲み分け」が続いていた。しかし昭和期になり中等教育学校への進学希望者が増加し、大阪市で初となる旧制中学校（5年制）を用地難の市内を避け、枚方町振の枚方丘陵西端に建設することが1941年決定された。将来的には日本で5番目の旧制の7年制高等学校をめざしていたため、敷地も広大であった。1.5万坪の敷地を関係地主と折衝して確保し、校舎建設などの工事1942年から始まった。しかし、戦時経済の逼迫のなか、仮校舎で学生も勤労作業に動員され、本格的な発展は戦後に新制の大阪市立高校となって以降となった（籠谷，1978：101-104）¹⁴⁾。

成立当初の経緯や、名称に地名がはいらない校名、大阪市内にない市立高等学校であるなど、

現在にまで続く大阪府と大阪市のねじれの問題なども背景にある。私が枚方市で中学生だった時には、この高校の授業料は府立高校とは異なり、また一定数の高校生が大阪市内から通学しており、彼らには授業料での優遇策があった¹⁵⁾。

IV 香里団地における地域社会の形成

1. 火薬製造所の跡地利用をめぐる紛糾

戦前、禁野火薬庫、枚方製造所、香里製造所という3つの広大な軍事施設があった枚方は軍事都市の性格が濃厚であった。敗戦後、その跡地の多くは、連合国賠償物件として放置されていた。1951（昭和26）年、財政難解消と敗戦後の失業対策のため、市は土地を管理する大蔵省と交渉、1952年に払い下げが決定する。

禁野火薬庫跡は日本住宅公団による中宮第2団地に、大阪大学工学部（のちに廃止され中宮第3団地・第4団地や高陵小学校に転換）となった。一方、旧枚方製造所跡は小松製作所に払い下げられた。日米安全保障条約が発効し、朝鮮戦争から2年を経過したこの時期、小松製作所は朝鮮特需によりアメリカから大量に砲弾を受注し、枚方でそれを製造するとの噂から、これに反対する日本共産党の急進派が工場内の機械に爆弾をしかける「枚方事件」が1953（昭和28）年6月に発生している。

旧陸軍香里製造所は民間3社に払い下げて砲弾製造再開を計画していた。これを阻止しようと香里火薬製造所問題衆議院通算委員の視察に「ここ（香里園駅）から製造所まで約1キロ半の道には“火薬反対”と赤字で書いた小旗を手にした枚方、寝屋川両市民、製造所に同居する香里小学校をはじめ、隣接する小、中学校、幼稚園の学童、園児4千人（枚方署調べ）と“火薬はいやだ”というプラカード数十本が一枚の到着を出迎えた」（『朝日新聞』1953年1月8日付）。この反対運動の結果、香里製造所はほぼ全域が日本住宅公団による大規模住宅地として利用されることとなった。

2. 日本住宅公団の宅地建設

日本住宅公団は1955（昭和30）年に誕生した。不燃集合住宅の建設と、その賃貸・分譲・管理が行う建設省の公団である（第2表）。そのルーツは戦前の同潤会（関東大震災後の救済・復興のために住宅建設を行い、鉄筋アパートが有名）や住宅営団にある。発足期（1955～57年）には、公団が建設する物件は、比較的公共施設が整備された既成市街地またはその周辺部に立地した小規模団地が多い（日本住宅公団、1981:183）。その例が京阪沿線では関目第1、第2団地である（第3表）。

第2表 日本住宅公団の系譜とその役割変化

| 名称 | 発足年 | 所管省庁 | 業務内容 |
|-------------|---------|---------------------------------|--|
| 同潤会 | 1923 | 財団法人 | 都市中間層向けの良質な住宅供給, 不良住宅改良事業 |
| 住宅営団 | 1941 | 内務省 | 同潤会事業を継承 |
| 日本住宅公団 | 1955 | 建設省 | 優良な住宅建設, 大型団地の造成, 住宅の規格化 |
| 宅地開発公団 | 1975 | 建設省 | 都市周辺の宅地地の開発, 都市の再開発 |
| 住宅・都市整備公団 | 1981 | 建設省 | 日本住宅公団と宅地開発公の合併。都市公園の整備, 土地区画整理と再開発, 特定公共施設の整備 |
| 都市基盤整備公団 | 1999 | 国土交通省 | 住宅・都市整備公団の改組。 分譲住宅(マンション)からの撤退 |
| 都市再生機構 (UR) | 2004～現在 | 国土交通省系の独立行政法人, 国土交通省所管の中期目標管理法人 | 地域振興整備公団と都市基盤整備公団の合併。UR 賃貸住宅の維持管理, 市街地整備による土地の売却, 被災地復興支援事業, 都市防災の宅地造成(土地区画整理事業), 公営住宅建設 |

次の段階が大都市の郊外における開発で, 都市施設自体の整備を伴うものである。土地区画整理法(1954年公布, 55年施行)による市街化区域内の道路, 公園, 浄下水道などの公共施設を整備して宅地利用の増進をはかることで, 優良な住宅建設用地を生み出して住宅を建設する「住開団地」である。この関西での代表例が香里団地や中宮第1・第2団地である¹⁶⁾。

1951年に計画された鉄筋コンクリートの公営住宅標準設計が51C型で, わずか12坪のなかに狭い空間の中で, 「食寝分離」と「就寝分離」を実現しようとした。これが関西でもその標準となり, ダイニング・キッチン, 水洗便所, 専用内風呂をもつ2DK住戸が大量建設された。建築史家の鈴木博之は100年前のイギリスの労働者住宅アルバート住宅にその類似を認め, 「100年遅れて近代プロレタリアアートの住宅を追いかけはじめた」(鈴木, 1999: 368)と評している。それでも団地の人気は若い都市中間層で非常に高かった。府営住宅が所得上限を設けて社会福祉的な色彩が強いのに対して, 公団初期の大規模住宅開発は団地という形をとって, 給与生活家族に優良でモダンな消費生活を促進する側面をもっていた。電気洗濯機, 電気冷蔵庫, テレビが当時の3種の神器であったが, これらの家電所有率は公団団地で高く, とりわけ関東よりも関西が高かった(原, 2012b: 25-26)¹⁷⁾。

第3段階はより大規模な基盤整備を行った「ニュータウン」の名称が冠される住宅団地である(吹田市立博物館ほか, 2018)。多摩, 千里, 高蔵寺, 千葉, 泉北, 平城などの著名なニュータウンである¹⁸⁾。香里団地は, 当時は名称こそ用いられなかったが, このニュータウン型の大規模住宅開発の先駆けでもある。

第 3 表 京阪沿線の日本住宅公団建設の団地

| 所在市区町 | 団地名 | 戸数(戸) | 交通機関 | 入居年 | 居住室数の種類 | 2 室型の家賃 (円) |
|-------|-------|-------|-----------------------------|-------|-------------|---------------|
| 旭区 | 赤川 | 77 | 大阪市バス | 61 | 1, 2, 3 | 11,000～12,000 |
| 旭区 | 中宮町 | 381 | 大阪市バス | 66 | 1, 2, 3 | 15,800～18,900 |
| 旭区 | 大宮町 | 178 | 大阪市バス | 71 | 1,2 | 21,000～23,200 |
| 城東区 | 関目第 1 | 300 | 京阪・関目 | 56 | 2 | 7,000～7,300 |
| 城東区 | 関目第 2 | 960 | 京阪・関目 | 57～59 | 単, 1, 2, 施設 | 7,300～9,100 |
| 城東区 | 守口駅前 | 146 | 京阪・守口 | 64 | 単, 1, 2, 3 | 9,700～11,200 |
| 寝屋川市 | 寝屋川 | 1560 | 京阪・寝屋川市+バス | 72 | 2, 3, 施設 | 19,100～19,600 |
| 枚方市 | 中宮第 1 | 350 | 京阪・枚方市+バス | 56 | 2 | 5,800～6,400 |
| 枚方市 | 中宮第 2 | 606 | 京阪・宮之阪/京阪・枚方市+バス | 56 | 2 | 5,900～7,200 |
| 枚方市 | 中宮第 3 | 1274 | 京阪・御殿山 | 69～70 | 2,3 | 13,100～14,100 |
| 枚方市 | 香里 | 4881 | 京阪・枚方市+バス/枚方公園+バス/京阪・香里園+バス | 58～68 | 1, 2, 3, 施設 | 7,500～10,700 |
| 枚方市 | 桜ヶ丘 | 530 | 京阪・星ヶ丘 | 71 | 2, 3 | 18,900～19,300 |
| 八幡市 | 男山 | 3944 | 京阪・八幡市+バス/京阪・樟葉+バス | 72～74 | 2, 3, 施設 | 19,400～20,600 |

注：施設は施設付住宅のこと。太字は枚方市域の団地を示す。数字の 2 は 2DK, 2K を意味する。単は単身者用。八幡市の現在の駅名は石清水八幡宮。現在は京阪橋本駅からバスの便もある。

資料：日本住宅公団（1975）などより筆者作成。

香里団地の初期設計に関わった西山卯三は、戦前には住宅営団に勤め、都内の同潤会アパートに暮らしていた。所管省庁は異なるが、その継承が日本住宅公団である。その後の公団の組織改編は、わが国の人口推移や住宅政策の変化によりめまぐるしい組織の変革・役割の変更がなされた（第 2 表右欄参照）。現在の UR は人口都心回帰を背景に、ニュータウン事業からは撤退して、資産の売却、賃貸住宅の新規供給は停止している。中心事業は賃貸住宅のリニューアルを含む維持管理と民間賃貸住宅の供給の支援などである。それに加え、現在では阪神淡路大震災や東日本大震災による被災地復興支援事業・都市防災事業がもうひとつの大きな柱となっている。

3. 香里団地の建設と抱える問題

この組織変遷を念頭に置きながら、旧香里製造所跡地に建設された香里団地の形成過程をみていこう。香里団地は 1950 年日本住宅公団大阪支所が区画整理事業で建設した郊外型大規模住宅団地の先駆けである。計画当初は人口密度 150 人/ha、総人口 2.0～2.2 万人で、その内訳は、公団住宅が 134,200 坪、3400 戸、148,00 人、分譲宅地が 123,200 坪、1200 戸、5,200 人である（日本住宅公団大阪支所、1962：7-9）。当初から人口の約 3 分の 1 は分譲地による戸建て住宅で、すべてが賃貸の中層集合住宅ではなかった。地形を活かした起伏地だが、当時としてはかなりの高人口密度居住を想定していた。1958 年に第一次入居が開始される。

枚方丘陵は非海成の砂礫層の間に海成の粘土層が介在した第三紀末から第四紀中期の大阪層群

からなり、筆者の通った香里小学校の崖でも植物化石がよく発見された。高谷・市原 (1961: 585-586) は、枚方丘陵より一段低い台地を枚方層として中位段丘に比定している。枚方製造所のあった交野台地がこれに相当し、天野川左岸の茄子作や高田の水田はその延長である。前者は起伏に富むが、後者の地形の上部は平坦で、開発の容易さは交野台地がまさる。

香里団地は元来、旧川越学区の茄子作に属し、枚方市駅に近い桑ヶ谷、藤田川を1丁目としてほぼ開発の順序にしたがって10丁目までが区画された。四周は香里丘陵に囲まれた小盆地をなしており、「山と谷のしわがこまかくきざみこまれた特殊な丘陵地」(西山研究室, 1957)である。香里ヶ丘8丁目付近の標高81.8mを頂点に西から東へ低くなるように平均50m前後の緩やかな起伏が連なる。日本では大規模な丘陵開発の経験の蓄積がない当時は、樹枝状谷が広がるじめじめした土地をどう開発するかが大きな課題であった¹⁹⁾。香里ヶ丘南公園のほか、桑ヶ谷公園、香里ヶ丘東公園などにはコナラ、アカマツをはじめ、アベマキ、アラカシ、ナマザクラ、エノキなどの暖温帯植生が残されている。幹線道路が幅15m以上で歩道も完備され、自家用車保有時代以前ではあるが、団地内のインフラは先進的であった。バスが唯一の交通アクセスであったことも誘因である。ただし、最寄り駅の京阪²⁰⁾の香里園駅(寝屋川市)や枚方市駅、枚方公園駅(枚方市)からはいずれも2km以上あり、京阪バスに10~15分乗車せねばならず、当時の都市近郊団地としては日本でも最も鉄道駅から遠い団地の一つであったといえる。

ショッピングセンターや学校、幼稚園、病院、市役所支所などが建設され、日常の生活が団地内で完結する新しいコミュニティという触れ込みであった。その地区センターが新香里ショッピングセンターであった。1960年に誕生したスーパーマーケット²¹⁾「ピーコックストア」は、大手百貨店「大丸」の食品スーパー部門(大丸ピーコック²²⁾)の1号店である。デパートの高級感をもった従来のスーパーマーケットとは異なるタイプの店舗である²³⁾。

もうひとつの団地の大きな問題は、20歳代後半から30歳代前半の子供1人を想定した若い核家族という均質な世帯で、公団の家賃を負担するのはかなりたいへんなことであった。それでも団地の大多数は共働きではなく専業主婦が圧倒的に多く、夫婦共働きは少数派であった。「家族は平均2.6人、80%が一般事務の会社員で、技術者がこれに次ぎ、家賃やガス・水道料金を会社が負担」する恵まれたサラリーマン層であったといえよう(枚方市史編纂委員会, 1984: 376)。東大の新聞研究所の調査では香里団地では大企業のサラリーマンが46%を占めていた(原, 2012a: 65)。しかし、団地内の少数派にとって、日中、子供をどこに預けられるかはだれが面倒を見るかは大問題であった。そこに夫婦とも小中高等学校の教師で、どちらか、あるいは両方の勤務先が枚方市内という世帯が、もっとも積極的に地域の運動にかかわることになったのである。

団地内にできた最初にできたのは1959年4月に開校の開成小学校である。当初は団地内の生徒のみを受け入れる予定であったが、旧川越村茄子作にあった木造の川越小学校に通わせていた住民から施設格差を指摘され、編入運動が起こる。枚方市教職員組合が開成小学校への転勤拒否戦術をとったこともあり、市の教育委員会はすんなり川越小学校の廃校を決定し、747人の児童

数を開成小学校へ受け入れた（枚方市史編纂委員会，1984：377）。

4. 香里めざまし新聞

日本中が 60 年安保で揺れる 1960 年 9 月，香里団地に住む有志が組織する香里ヶ丘文化会議は「香里めざまし新聞」第 1 号を発刊した。その中心人物は多田道太郎（1922-2007），樋口謹一（1924-2004），藤田光一，大淵和夫（1927-1977）ら旧制の京都大学文学部で文学・哲学などの人文学を修めた 30 歳代の俊英の知識人であった。

その趣旨として第 1 号の冒頭に「私たちはコンクリートの壁にへだてられてともすれば，バラバラなりがちです。私たちが考えていること，感じていることを交流する，自主的な話し合いの場をつくりたいと思います。そのための民主主義的なやり方で，つぎのような文化活動を行います」として，会員懇談会，研究会，同好会，講演会，映画会，その他となっている。第 1 回の講演会は「団地の医学」として時代の寵児であった小児科医の松田道雄²⁴⁾を招聘している。

この会議の初期に最も力を入れたのが団地内での保育所設置である（和田，2012）。男性幹部が中心となり，市や住宅公団に陳情，署名活動などで翌 61 年 2 月には設置の確約をはやくもとりつけている。1962 年 7 月 2 日に団地内の五本松に発足し，65 人を収容した。このほかこの会議は，団地内で食料品をスーパー方式で独占的販売していたピーコックストア²⁵⁾に対して価格の引き下げを求め，自らは近隣の川越農協と組んで近隣農家が生産する野菜を新香里のセンター前で休日に販売する青空市を開催した。団地に居住する主婦からは歓迎されたが，家主である公団側や利害が対立する団地内の商店会とは反目することになった。

その後，こどもフェスティバル（66 年まで），京阪バスの増発要求・運賃値上げ反対運動，物価問題，公団家賃値上げ問題，団地内の交通事故などが誌上で議論されたが，66 年頃を境として運動自体が衰退していく。70 年 12 月「香里ヶ丘文化会議 10 年を顧みて」の特集が生まれ，匿名ではあるが，中心メンバーの座談記録が掲載されている（「香里めざまし新聞」第 101 号，1970 年 12 月 25 日付）。

B そうした活動もだんだん老化していく。野蛮さがなくなるかも。

I にもかかわらず，清新な若い人が入ってこなかった。

A 僕なんか事務局やら新聞やいろいろな順ぐりにやっけて四年ほど出ずばり。これ以上やれんと思うて投げだした。〈中略〉

B 眠ってしまったわけはもうひとつある。設立の時は，はっきりした認識があった。国民の日常生活にまで民主主義の根をおろすには職場中心の組織活動ばかりでなく，居住地域を単位とする市民生活と直結した運動が必要だという認識。団地に関係がある問題が多かった第二期まではよかったけれど…。

I 切実な問題はたくさんあるわけだが，団地と結びつけて取り上げるにはどうも難しい。保育所問題なんかは文化会議から切り離して独自に発展していった。

- B** ところがその後がない。たとえばの話、青空市場を中心としてね。これを切離して生協みたいな組織を發展する。そういった問題が見つからなかった。
- I** 組織にならんと永続な問題にはならない、という法則がありますね。我々は初めから組織にはしないでおう、という気持ちがあった。組織否定という点ではあとからできたてベ平連に近い。それを地域でやろうというわけや…。
- B** 市民主義ですね。保育所運動みたいに細胞分裂した組織が伸びたらそれでいい。文化会議は分裂の母体や (笑) 〈中略〉
- I** ベ平連なんかまあ家出人集団みたいなもんやけど、地域運動は家を守ろうというのやから、ベ平連的になりにくいわね。
- E** このまま冬眠を続けるか、それとももう止めるか。

「検死報告の作成会」とも自嘲した誌上討論であるが、抵抗権に根ざした民主主義、上の座談会で **B** が述べる「居住地域を単位とする市民生活と直結した運動」、行政に与しない無党派の市民運動の限界がここに吐露されている。香里団地の居住環境は子供が2人になると手狭になり、広い居住環境を求めて転出する人が多くなる。団地内や近隣では、香里ヶ丘7・8丁目の分譲戸建て住宅への近接移動が考えられた。

この流動性のなかで上に言及される「保育所問題が文化会議から切り離して独自に發展」は、香里ヶ丘文化会議の有力メンバーでもある東大教育学部出身で枚方市にあった大阪市立高校社会科教員の諸田達男 (1930-1996) の力も大きかった (諸田, 1964; 1965; 1967)。論客でありながら人情味のある諸田は人望も厚かったが、67年に日本共産党から枚方市議員に立候補する前後には文化会議との溝は大きくなる。

1960年代後半に市立幼稚園づくりに奔走し、1967 (昭和42)年、団地内に香里幼稚園開設に漕ぎ着けた母体は、1966年1月に94名の母親で結成された「私立幼稚園開設をすすめる会」である (和田, 2015: 95-96)。この主力メンバーには日本共産党シンパの団体で、女性の共産党支持者を増やす母体であった (原 b, 2012: 96)。そのトップが黒田 (旧姓 松下) 昌子²⁶⁾で、香里団地を拠点に新日本婦人の会枚方支部事務局長などを歴任する。60年代前半の保育所開設運動が香里ヶ丘文化会議の男性幹部が中心だが、60年代後半の幼稚園運動は就学年齢の幼児を抱える女性を中心で、その母体が新日本婦人会であった。日本共産党が団地の女性票をとりこむ政策が背景にある。文化会議のとんがった進歩性は、より大衆的な党派主導の住民運動に置き換わっていった。ここに私は香里団地の世代交代、居住者の入れ替わりとニュータウン自体が普及・一般化したことも影響していると思う。ただ、これを背後から支えたのが、革新色の強い枚方市教職員組合や枚方市役所の職員であったところに枚方市の特殊性がある。

5. 枚方市の政治風土とその変質

香里団地に長く在住するが、学究肌の香里ヶ丘文化会議の活動に一定の距離を置いた人物に家

高憲三がいる。もとは市の中学校の社会科教諭だったが、途中で市役所職員に転職、最後は枚方市教育長を 2 期 8 年務め、枚方の市民運動を行政の方から下支えした人物である。家高は『枚方に住んで働き 闘って－住みよい街・枚方をつくりあげた民運動と行政の記録 そして 自伝』という 355 頁に及ぶ私家版の本を 2006 年に刊行した。それをもとに簡単に氏の経歴をたどろう。

1931 年京都市左京区山端川岸町に生まれるが、父は若狭から出てきて京都大学の事務員であった。1944（昭和 19）年、戦火激しい時期に京都一中、現在の洛北高校に入学するが、新制との変わり目の時期で、鴨沂高等学校卒業となる（1950 年）。戦前は地理が好きで、海軍兵学校にあこがれ世界を回る夢をもった軍国青年であった。それが敗戦によってこれまで教えられていた価値観の百八十度の転換に戸惑いながら、社会主義、共産主義への関心を深め、高校卒業後に日本共産党に入党する。

私は 50（昭和 25）年 6 月の朝鮮戦争に危機感を抱いた。その年の 3 月に鴨沂^{おうき}高校を卒業したばかりであったが、アメリカの言いなりになってる日本政治のあり方を変革することなしに平和も繁栄もない、そのために戦うことが必要と決意し、獄中 18 年で戦後に出所した共産党幹部の徳田球一、志賀義雄、さらには中国で抗日戦を闘い帰国した野坂参三等がいて果敢に闘争を展開している日本共産党に入党した。青年共産同盟（青共、現在の民青）ではなく、何人かの党員がいる修学院細胞に所属し、活動した。修学院駅近くの壁新聞に作成した日本共産党修学院細胞名の新聞を書いて早朝にはり、多くの人に読んでもらった。（家高、2006：208-209）

その活動のさなか川端署に逮捕されたが、下鴨の家庭裁判所で保護観察 3 ヶ月の判決で刑を免れた。「この一件は私の人生で最も大きなでき事で、もし地裁送りになり何等かの刑罰を受けていたら、教師や公務員・教育長になれず今の私はない」（家高、2006：210）。

当時の日本共産党の武装闘争路線にも最初は与し、ロシア語の学習などの研鑽も積んでいた。その後、大学受験に失敗し繊維経済研究所に入所するが組合を結成したことで退所させられる（1952 年 2 月）。しかたなく京都学芸大学二部に入学し、4 年制へ編入した。京都学芸大学在学中もアカと目され、第一希望の地理研にはいれなかったが、西洋史の研究室にいれてもらいながら、地理学的な素養を磨いていった。若き日の自然地理学者の水山高幸氏に公私にわたり世話になったという²⁷⁾。1955（昭和 30）年には自己批判の仕方に納得できず、共産党を自然離党している。

卒業後は茨木市内の小学校勤務を経て、1962（昭和 37）年、枚方第四中学校に奉職する。同時に枚方市教職員組合記長など歴任する。妻も京都学芸大学の出身で、枚方市内の小学校教諭という夫婦共稼ぎであった。1958（昭和 33）年に中宮第 2 団地に新婚で入居し、1961（昭和 36）年 12 月から香里団地の一角、香里ヶ丘 8 丁目に新居を構えた。

これらの団地は、それまでにはなかった初めての大型住宅団地であった。白亜の鉄筋コンクリート造りの集合住宅で4/5階建てと2階建てのテラス住宅もあり、それまでにはない設計で、その間取りも2DKや3DK等というそれまでにはない設計で、狭い空間を合理的に使い勝手がよいようにつくられた。入居者は団地住まいであることに誇りをもち、周囲からは羨望の目で見られた。

当然のことながら家賃も高く、高給取りか共働きでなければ入居できないのが現実であった。私たちも58(昭和33)年に中宮第二団地に入居したが、2DKの間取りで家賃は約4千円であった。私は教師になって3年目で、本俸1万円少しであり、共働きでなければとても入居し、生活できなかった。ビールも一本買いであった。(家高, 2006:22)

そこで経験したのが、前章で述べた香里ヶ丘文化会議によるさまざまな公団や市への要求であった。1歳2ヶ月の娘を香里団地保育所にあずけることで、枚方市立第四中学に勤務できた。職住接近ゆえ可能となった選択肢であった。

その後、小学校に行った児童を、両親が勤務を終えるまで預かってもらえる学童保育の運動へと団地内の市民運動はすすみ、1966(昭和41)年には、香里団地内の五常小学校と中宮団地がある山田小学校で定員50名の学童保育が開始された。さらには病児保育運動が香里団地内で興る。団地の中央(香里ヶ丘3丁目)にあった市営診療所跡を利用したもので、献身的な医師によって1969(昭和44)年にはこれも実現させた。

家高は72(昭和47)年、中学校教諭から枚方市役所職員に転職する。企画部参事というポストである。それも独任制の調査参事で、自分が必要・重要と考えた仕事を自分で決裁をとって執行し、責任をとる制度で、業務内容を企画部長、助役、市長に報告するだけで、補佐の職員も配置され、市議会での出席も要請される以外は不要という恵まれた地位であった。元枚方市立図書館員の石橋進は「市長直属の遊撃手」と表現している(石橋, 2014:325)。山村富造、北牧一雄と続く枚方市の革新首長の黒子であり、市が人口増加で学校建設に追われる逆風のなかで、社会教育・文化行政で強いリーダーシップをとり、革新市政の目玉としていった。市内への高等学校誘致を皮切りに、図書館、公民館、スポーツ施設建設(王仁公園グランド、穂谷の枚方市野外活動センター、枚方市立総合体育館、御殿山の渚体育館)などの社会教育施設の建設、配置、運営に邁進する。最初は企画畑であったが、1981(昭和56)年に社会教育部長になると、用地買収や市民・市議員への対応にもあたる清濁併せの柔軟性を備えていた。とりわけ図書館は12の分館(半径1.2km)、10の分室(半径500m)を設置するなどきめ細かいサービスを提供「枚方モデル」を編み出した。

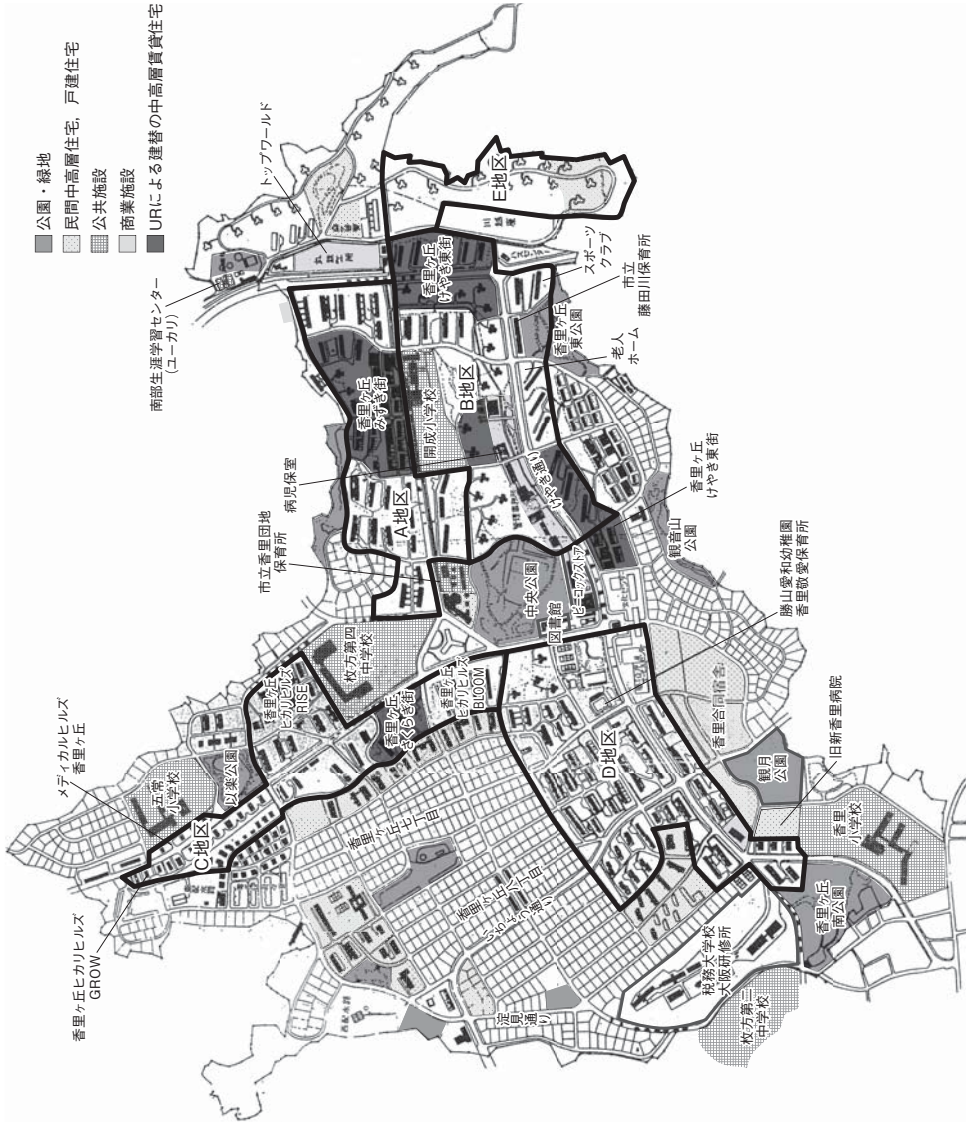
1986年に企画部長に転任すると、兵器生産のまちという戦前の負の遺産を強烈にアピールして府で初めて非核平和都市宣言へ邁進し、これを発展させる形でアジア市民音楽祭を開催する。そして1988(昭和63)年に枚方市教育長の座にのぼり詰める。市レベルの教育長ポストは校長経験者が多いなか、家高の軌跡は、枚方教職員組合書記長を皮切りに、雨森秀芳枚方教職員組合

委員長とのつながり、農民組合から大阪府議を経て枚方市長になった社会党市長の山村富造との深い関係もあった（家高、2006：270）。

私の経験した学生時代の枚方市は、このかなり偏向した革新市政の渦中にあった。枚方市が 27 もの図書館の分館や分室をもっていたこと、それが公民館と併設されていることなどは、当時は意識していなかった。「社会教育の主体は市民である」という「枚方テーゼ」（1963）に代表されるように、社会教育や図書館行政において、枚方市が全国的に注目され（宮崎、2005）、それが香里団地での子供に本を読ませる運動から発祥したことも今回の探査で再認識した。ただ、早くに地域図書館ネットワークが形成された地元密着型の文化行政・社会教育は、人口 40 万人都市としては貧弱な中央図書館の裏返しでもある。しかもその建物自体、小松製作所敷地を購入して移転した関西大外国語大学の旧図書館を譲渡されたもので、設備や使い勝手、交通の便からも大いに問題がある。高等学校の地元集中、通知表の廃止という香里小学校の独自の動きなど、府の方針とも異なる独自の方針と連なっていく。

これまでみてきたように、1970 年代までの枚方は流入人口の激増、若年人口の増加で学校建設に追われたが、社会教育施設の充実では後追いではなく、社会党・共産党が主体の革新市政の目玉として、むしろ豪腕でもって拡充していった。そこに大きく関わったのが、香里団地で生まれた進歩的、民主的思想を醸成した政治風土と人物であった。その前期は大学人、後期は枚方市内の小中高等学校教員という違いはあるが、担い手は一貫して教育者であった点に枚方市の特色がある。北牧市長も市の中学校長、教育長からの転身であり、片腕となる教育長の家高も労働運動や日教組の活動家である。

ただ、1980 年代になると、枚方市で圧倒的な勢力を持っていた社会党・共産党を中心とする革新系勢力に代わって、公明党が市内で勢力を伸ばしていく。枚方丘陵の西端に 1982 年、関西創価小学校が開校した²⁸⁾。枚方・交野市周辺はこれらの創価学会、公明党の強力な地盤となり、その子弟が通う教育のメッカとなっていく。久井英輔（2017）は高度経済成長期の団地における市民の連携を自発的なものと政治宗教的なものに分けているが、枚方では香里団地で生成した後者の連携がより拡大再生産され、80 年代以降も継続するところに特異性がある。横並び、庶民型の行政は、枚方市駅周辺の再開発でも有効な策を見いだせないでいる。1975 年に枚方市駅前再開発事業の一環として郊外型百貨店が開業する。自市での購買行動がみられる大都市圏の多核化の例としてあげられる枚方市であったが（藤井、1983：33-34）、住宅地が交野台地や沖積低地に無秩序に拡張するにしたがい、枚方市駅前は自家用車利用に対応できない中心駅になってしまい、百貨店自体も撤退した。いまだ突出した教育文化活動や有効な経済政策を見いだせないまま、人口 40 万人の中核市としての実感はなく、若い世代は後発のくずはローズタウンのまちづくりに魅力を感じるようになった。全体として市の活力の低下を引き起こしていることは認めざるを得ない。



第6図 香里団地完成時のプランと現況
 (日本住宅公園大阪支所 (1962) の付図を基図に、ゼンリン大阪北営業所 (1999) 『ゼンリン住宅地図図収方市南部』, UR 資料, 筆者の現地調査等で作成)

V 人口沈静期・減少期の香里団地

1987年に関西文化学術研究都市建設促進法が施行され、国家的プロジェクトが京阪奈丘陵で始動する。その1つのクラスターに枚方市の氷室・津田地区（旧津田町域）が指定され、91年のイオン工学センターの開設、大学移転（大阪国際大学、関西外国語大学・短期大学の穂谷キャンパス大学）、杉地区などの住宅地も建設された。1989年の片町線（学研都市線）の長尾～木津間の電化と松井山手駅（京田辺市）の開業と、97年のJR東西線開通が枚方市東部の人口増や開発や通勤・通学流動に与えた影響は大きい。この地区から大阪の「キタ」への直行経路ができ、枚方市駅に交野台地をバスで移動することは少なくなった。さらに2010年には第二京阪道路の巨椋～門真間の開通によって、京都駅とも直行高速バスで結ばれ、京阪電車以外で京都と大阪をむすぶ丘陵沿いのルートが誕生した。

その一方、市内の公団団地、大手・中小のディベロッパーによる戸建て住宅は、世代の高齢化、子女の進学・就職による転出で、人口構成は大きく変わっていく。90年代以降の香里団地とその周辺の現況を土地利用と景観の変貌から見ていこう。

団地の分譲地のなかで戸建て住宅は香里ヶ丘7・8丁目に集中するほか、外縁部にも分散的に立地していたが、これらは90年代以降、現在まで基本的にまとまった土地売却による建替はない。ただし周縁部にあった企業社宅の多くは民間ディベロッパーによる中高層マンションに建替はかなりみられる。

一方、団地中心部のA・B・C地区の4～5階建の中層賃貸住宅の変化は大きく、現在もその動きは継続している（第6図）。その改変の方向は、次の6つにまとめられる。1）日本住宅公団を継承する都市再生機構（UR）による中・高層集合住宅化、2）民間への土地売却による高層マンション、3）盛土や進入道路を変更しての30～50坪前後の戸建て住宅群。4）都市再生機構による中層集合住宅の外装変化、内装の一部改変、5）商業施設、公共施設への転用、建替、移転、6）住宅型有料老人ホーム。

これらの変化のうち、1）～3）が香里団地の新たな人口流動の牽引力となり、30～40歳代前半を中心とする分譲戸建持家、賃貸中高層住宅の住民を構成している²⁹⁾。

団地の建替は1992年に再生グランドプランの策定に遡る。1998年10月にはまず旧A地区が「香里ヶ丘みずき街」として入居を開始する。これは共同分譲住宅建設を目的とする全国初の事例であった。1つの棟でも階数が異なり高低のアクセントをつけている。1DK～2LDKなど各種タイプがあるが、2DKや1LDK中心の若い人の向け賃貸住宅である。区域内は、階段・スロープ・緑地で構成され、35歳以下の名義契約人であつ同居家族も35歳以下の親族で住み替えではない人を対象にした特典もある。自走式、平面式、機械式の駐車場が区画内に設けられ、大階段広場や親水空間を備えたせせらぎが幹線道路につながりアメニティも工夫されている。



第7図 C地区の民間への売却地の現景観
(2019年撮影)



第8図 建替られたピーコックストア
(2019年撮影)

2001年～2005年にかけて管理を開始したのが、旧B地区の「香里ヶ丘けやき東街」で3か所に分かれている。いずれも中層5階建または高層6～10階建の賃貸住宅である。

2006年に管理を開始した「香里ヶ丘さくらぎ街」は香里ヶ丘5丁目の旧C地区の6棟（うち1棟は集会所棟）の全面建替で、団地内では後発の部類である。全二者よりも部屋数が多く広いため、核家族以外に、中高齢者の戸建て住宅からの住み替えなどにも利用されている。

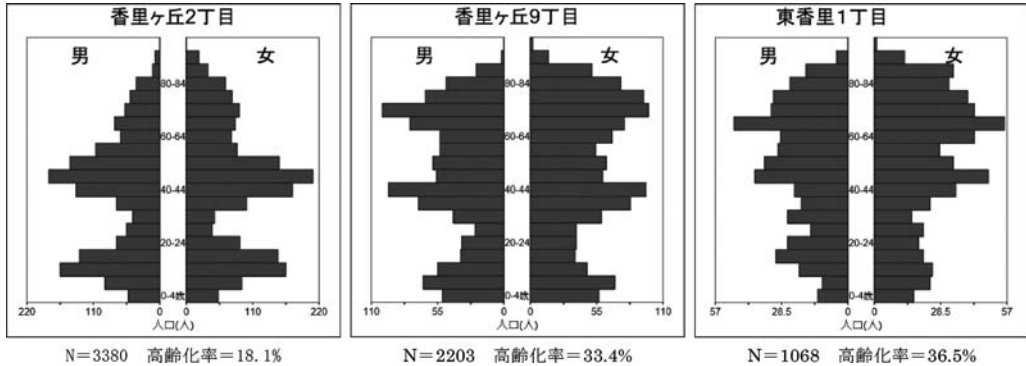
このほか、C地区の18・19棟は更地で売却された。ここにもともと団地の北端（宮ノ下町）にあった有恵会病院が2018年に移転してきた。この新香里・枚方公園線の幹線道路にそった旧C棟は府内の民間住宅会社に売却され、かさ上げして民間の40坪前後戸建て住宅となっている（ヒカリヒルズ、第7図）。進入道路を背後に計画変更して住宅内の静寂を保っている。幹線道路に面した一部は高級志向のテラスハウスや戸建て住宅となった。この地区にはデイケアセンター、個人医院、薬局などが集中し、「メディカルヒルズ香里ヶ丘」と命名されている。

2003年には藤田川の香里下水処理場跡に枚方市立南部市民センター（現・南部生涯学習市民センター）が開設され、高齢者や子育て世代のための地域公民館となっている。団地の象徴であったピーコックストアやショッピングセンターも建替られ（第8図）、高齢者世代向けの商品と若い世代向けの商品が混在することになった。その一方、近隣のショッピングセンターとして機能していたD地区のコーキューセンターやA地区のABCセンターなどの近隣商業施設は、店舗が歯抜け状態となり、高齢者向けのカラオケ、体操教室、女性のパート作業場、居酒屋、事務所などに様変わりしている。

藤田川の京阪バス車庫はもと香里製造所への鉄道引込線の終点であり、工員のための1階建の木造長屋の川越寮、桑ヶ谷寮であった。これらはバス車庫、商業施設、公共施設となっている。

このようなリニューアルによって、現在の香里団地はすべての地区で高齢者比率が高くなるはっていない。それは2018年の5歳ごとの人口構成をみればわかる（第9図）。香里ヶ丘2丁目の「香里ヶ丘みずき街」はUR都市再生機構が管理し、手ごろな物件（7～8万円前後）と恵まれた周辺環境とあいまって、子育て世代の居住が増え、校区の開成小学校も増加傾向にある。

一方で、いちばん最後に建設されたD地区（1960～68年）は現在も「香里D地区」として、



第9図 香里団地，東香里の年齢別人口構成（2018年）
（枚方市の町丁別統計から筆者作成）



第10図 D地区に残るスターハウス型集合住宅
（2019年撮影）

鉄筋4・5階建の外装は一新されてはいるが、耐震化、バリアフリー化も一部で実施されたが、建替や間取りの変更はない（第10図）。エレベーターがないため、上層階は空き部屋も多い。賃料の安さ（1R～3DKで3万～6万円）で、若い単身者の入居もみられる。これがこの地区の人口構成に反映していると思われる。香里ヶ丘9丁目の人口ピラミッドは、70～74歳と40～44歳の2つのピークがある。

当初から戸建て住宅として分譲したいちょう通りをはさむ香里ヶ丘7・8丁目の区画は敷地面積が100坪単位で分譲された。多くの家で改築はされているが、宅地分割はほとんどないため、働き盛りの40歳代が購入するには販売価格が高すぎ、世代交代が進まず高齢化が顕著である。

香里団地の建設当初は、周辺住宅地・旧集落との間には丘陵や谷が介在し多くの緑が残されていた。それがこの60年間、丘陵部の宅地造成や高層マンション、谷筋の戸建てミニ開発で人口は急増した。ただし急傾斜地の狭い道路、公園・緑地、公共用地の少なさなど多くの課題を抱えた住宅地でもある。多摩ニュータウン（金子，2011）の周辺、川崎市多摩区での侵食谷や急傾斜でのスプロール化に類似した風景が展開する。原田らはこの状況を、周辺地域との関係からみた郊外住宅団地の居住実態を、香里団地とその周辺の既存集落を対象に、香里ヶ丘、茄子作、藤田町、山之上の4地区で比較検討している（原田・馬場，2008；原田，2009）。筆者の住む戸建て分譲住宅でも周辺の住環境は激変した。

わが娘・息子たちの通った地域の人口急増期の建設された小・中学校（東香里小学校，東香里中学校）は生徒の減少、学級数の減少に直面している。分譲住宅地は地区全体が建築協定によって分割後の敷地が165㎡（約50坪）以上ないと更地にして売却できない制約がある。このこと

は、30～40歳代の若い子育て世代が戸建てを購入して住むことをきわめて難しくしている。そのさなか、地区内の東香里小学校の統合が市によって決定された。今後、若い世代がこの地に転入してくる可能性はさらに低くなり、住宅価値の低下にもつながる。すでに耐用年数に達した木造戸建て住宅は、高齢者夫婦、一人住まいには広すぎる。病院通いや子供世帯の近居に転出する世帯、駅周辺の便利なマンションに転出する家、さらには健康に不安が出て、さまざまなタイプの老人ホームに移る人、近くの病院に入院する人がきわめて多い。市内でも最も高齢人口の高い地区となってしまった(第9図)。

その一方、香里団地の一部やその周辺には活気が戻ってきた。幼稚園も新設され、団地内の小中学校も再び生徒数が増え、子供たちの声が再び聞こえるようになった。次々と建替られていく4～5階の旧中層棟には、足場が組まれ外装壁面にシートがかけられ、躍動感が戻ってきた。ただ、長年団地に住む高齢者世帯が静まりかえった住棟(D・E地区)と、新たにリニューアルした住棟、公団から民間住宅業者に売却されて40坪前後の敷地に建つコンパクトな戸建て住宅、高層住棟などの対照はますます鮮明になる。かつていわれた均一化した団地景観はもはや存在しない。公団時代のような統一感はないが、もともとが丘陵部の尾根や斜面や谷を活かして、戸建て住宅や社宅なども混在し、多数の緑豊かな公園を多数配置した住宅公団時代のインフラの遺産は大きい。「巨大な長屋のオーナー兼ゼネコン」であった公団は、UR都市再生機構と組織変革され、見かけ上はさぶ業務が縮小された。ただ、大規模団地の建設で培われた地形を活かした高所から見据えた「まちづくり」のノウハウはけっして捨てたものではない³⁰⁾。旧香里火薬製造所の官舎跡の戸建住宅に住む孫も2年後には、私の卒業した香里小学校に入学する。

付記

みかけは論文の体裁だが、実質は筆者の記憶や人脈をたどった破格のミクロ地域史となってしまった。香川(2011)は幼少期の体験を住宅研究のライフワークにしたが、私の場合は秘蔵していた幼少期経験のお披露目である。都心回帰が進むなか、50年近く枚方という郊外都市に住んでいるので、いまだ小中学校時代の友人や先生とも交流がある。その多くは市内在住ではないが、みんなこの地がひとつの拠り処になり、飲み会に集まってくる。中学校の英語の恩師柳本吉之先生(もと枚方市立小学校長)は関西大学第一高等学校の出身、今回の執筆にあたり貴重な情報と家高氏の文献を恵与いただいた。圧倒的な日教組、革新市政もとの学内では目立たない存在ではあったが、今から振り返ればむしろ数の暴力に屈しない良識派であった。西山卯三文献に関してはNPO法人西山卯三記念すまい・まちづくり文庫NPO(木津川市、積水ハウス総合住宅研究所内)に御世話になった。また、西山卯三を引き継ぐ京都大学工学部三村浩史研究室出身で近所の間野博(県立広島大学名誉教授)氏にも助言いただいた。お礼を述べたい。

注

- 1) 中核市とは1994(平成6)年に地方自治法「第252条の22第1項の中核市の指定に関する政令」で創設され、翌年4月1日に施行になった人口30万人以上の市である。政令指定都市に準じて都市計画の策定など都道府県の権限の一部を移管される。最初1996年に指定されたのは、宇都宮、新潟、富山、金沢、岐阜、静岡、浜松、堺、姫路、岡山、熊本、鹿児島島の12市で、いずれも県庁所在地やそれに準じる拠点性が高い市であった。このうち、新潟、静岡、熊本、堺は21世紀に政令指定都市に移行している。現在の中核市は面積要件(面積100km²以上)や昼夜間人口比要件(昼間人口が夜間人口よりも

- 多いこと）が取り扱われ、2015（平成 27）年には下のランクの特例市と一体化することになり、要件は人口 20 万人以上のみとなった。枚方市は 2014 年 4 月に中核市となっている。なお、大阪府内では堺（1996 年、2006 年政令指定都市へ移行）、高槻（2003 年）、東大阪（2005 年）、豊中（2012 年）について 4 番目である。
- 2) 関西外国語大学・同短期大学、摂南大学枚方キャンパス、大阪国際大学、関西医科歯科大学、大阪歯科大学、大阪工業大学情報科学部・薬学部。
 - 3) 2018 年 6 月の大阪北部地震の会見で菅義偉官房長官が「まいかた」と読んだように、「ひらかた」の認知度は低い。市が独自に全国につてを頼って調査した結果では、全 1371 人の回答のうち、「ひらかた」と正しく読めたのは 822 人（60%）、「まいかた」は 350 人（26%）という結果であり（2019 年 2 月 18 日付「産経新聞」夕刊）、認識向上のためのプロモーション動画を市で作成した。
 - 4) 1946（昭和 21）年、香里国民学校として創立した戦後市内で最初の小学校で、香里火薬製造所の敷地を転用して建設された。59 年に鉄筋新校舎を建設する。転入当初は公立ながらその設備の素晴らしさに家族一同驚いた。
 - 5) 当時（1963 年）の京阪電車開発部のパンフレット（私家蔵）をみると、「香里園京阪分譲住宅」となっており、木造 2 階の店舗付住宅 4 戸、鉄筋平屋 15 戸（3 タイプ、平均価格 449 万円）、木造平屋 35 戸（10 タイプ、平均価格 373 万円）が 2 期としていっせいに分譲された。申込者の資格年収は鉄筋で 36,800 円（35 年月賦元金均等償還）、木造で 38,180 円（18 年月賦元金均等償還）であった。南面する傾斜地に建ち、3 LDK の間取りで、テラス、風呂、ステンレス流し調理台、湯沸器、無臭便所であったが、香里団地にはあった下水道はまだ敷設されていない。住宅公庫融資金が 69～88 万円ついていた。
 - 6) 茄子作はいまも古い農村の佇まいを残す天野川の左岸、枚方丘陵の西端から交野台地への移行点にある畑地と水田が交錯する近郊農村である。1933（昭和 8）年、茄子作農業実行組合は川越中央市場を開設している。ここから香里団地の青空市場へ野菜を持ち込んだ。氏神の春日神社へは正月の初詣にはいくが、それ以外に旧村とのつながりはほとんどなかった。近隣では規模の大きな集落で、近世には端野・清水・桜井・堀小山・奥野・岡市・高橋の 7 宮座をもち、近世期に高田という枝村が形成されていた。
 - 7) 慶長 6（1601）年には、三矢、岡、岡新町、泥町の四ヶ村を枚方宿とした。まちなみは連担している。川船の運賃は上りが高いため、多くの人々は伏見から天満の八軒家までの下りのみを利用し、貨物にもその傾向が強い（枚方宿の比は 10:1 といわれる）。枚方も上り下りの片方だけしか利用されない片宿の宿命を内在し、宿場経済圧迫の要因ともなった。そのため集客や宿場繁栄のために、飯盛女や水茶屋に代表される歓楽の要素で人をひきつけていた側面も大きい（北崎、1983:1640）。
 - 8) 京阪の会社創立は 1906（明治 39）年で、大阪・天満橋—京都・五条間 46.57 km の運輸開始は 1910（明治 43）年 4 月である。香里園の旧駅名は郡の雅名「香里」であり、1938 年に「香里園」に改称した。地元地主らも賛同して駅の東側を遊園地として開発、名古屋の菊花園を招いて菊人形興業をおこない集客を図ったが長続きせず、1912（明治 45）年には売却、新たに枚方駅（現在の枚方公園駅）付近に遊園を計画した。これが現在のひらかたパークである。その後、香里遊園跡地には戸建て住宅（1920 年に香里園土地建物会社、1924 年京阪土地株式会社、1927 年からは京阪直営と経営主体はめまぐるしく変わる）、大阪玉造から聖母女学院の誘致（1932）、成田不動尊大阪別院の建立（1939）などで一帯の開発は進んだが、その奥の丘陵部は未開発であった（和田、1995 b；野間、2006）。
 - 9) 1923（大正 12）年 3 月 29 日に創設された帝国陸軍の兵器製造施設で、前身は 1879（明治 12 年）設置の砲兵工廠。本廠が東京砲兵工廠で、支廠が大阪砲兵工廠であった。
 - 10) 爆風による周辺民家や学校が焼失、爆風による飛散は半径 2 km、死者 94 名、負傷者 602 人を数えた。1956 年跡地には中宮団地が造成された。現在は記念碑として火薬庫を囲んでいた延焼防止用の土塁が残されている。津田駅からの鉄道引込線跡の一部は枚方市の愛称道路「中宮平和ロード」と名付けられ、軍用電柱や陸軍用地の石柱が保存されている。枚方市立中央図書館 1 階平和資料室には禁野火薬庫の詳しい展示がある。
 - 11) これらの痕跡は住宅公団用地の範囲外で、車庫、商業施設、府営住宅、戸建住宅などに転用され現在に

- 至っている。高田寮の木造長屋が火災で焼失、その後府営住宅となったのは、中学時代の筆者の鮮明な記憶となっている。
- 12) 大手私鉄とは、電鉄業、電力業、不動産業の三つ巴の壮烈な競争と、そのまわりを観光業、バス事業、小売業などが捕捉するコンツェルンといわれる。京阪は電鉄会社が戦前に近畿圏全域に勢力拡大電力業に進出した例である (片木編, 2017: 223-227)
 - 13) 発祥の地である牧野は附属看護専門学校の校舎として使用され、2018年4月、看護学部と大学院看護学研究科を開設した。
 - 14) 畠山晴文牧方町長は当初は府立中学の誘致に名乗り出たが、人口増加の著しい豊能・中河内地域が優先され、大阪府立第十六中学校 (現・大阪府立池田高等学校) と大阪府立第十七中学校 (現・大阪府立布施高等学校) の建設が決まった。
 - 15) 大阪市教育委員会は1978年9月30日、大阪府教育委員会に対して、大阪市立高等学校の大阪府への有償譲渡を申し入れたが、反対にあい白紙撤回となった。しかし大阪維新の会による現在の大阪府と大阪市の蜜月のなかで、2022年に大阪市立の全21高校を大阪府に無償移管することで府と市の教育委員会は合意した。
 - 16) 首都圏の多摩平、常盤平、高根台、港南台、洋光台、名古屋圏の鳴子、大阪圏の狭山台、金剛、北九州圏の藤松などである。
 - 17) 1960年の電気冷蔵庫の普及率はひばりヶ丘団地が23.4%であるのに対して、香里団地は58.0%と2倍以上に達している (原, 2012 a: 26)。香里団地から枚方公園に向かう幹線道路に隣接した菊ヶ丘には松下電器工学院が63年に竣工しており、松下電器の技術者・研究職や管理職が香里団地周辺に多く居住していたことは私の記憶にもある。
 - 18) 多摩、千里、泉北、千葉ニュータウンは日本住宅公団独自の事業ではないが、その一部分を担っている。
 - 19) 新香里周辺の道路に雨水が集まり道路が冠水する排水不良は団地入居初期から問題となっていた。現在の親水空間としてのこもれび水路はその対策でもある。
 - 20) 1910 (明治43) 年開業の京阪電気鉄道は、淀川左岸、ほぼ京街道に沿った電気軌道が前身である。当初は軌道法による1両電車で大阪天満橋と京都 (最初は五条、のちに三条) まで運転した都市間鉄道である。京都、大阪の両ターミナルでは、国鉄東海道線 (現 JR 京都線) や阪急京都線と競合するが、これらが淀川右岸であるため、実質的には左岸地域では独占的な大量輸送交通機関であった。
 - 21) スーパーマーケットは1930年に大不況下のアメリカ合衆国、ニューヨーク州ロングアイランドに開業したキング・カレン (King Kullen) といわれている。セルフサービス方式でさまざまな品物を気兼ねなく見定めてショッピングカートでレジにもっていく方式はマーケットを超越した (スーパー) といわれた。日本初のスーパーマーケットは、上の方式を採用したの果物商出身で、1953年に東京都内青山に開業した「紀ノ国屋」といわれる。ただスーパーマーケットの名称を最初に冠したのは京阪で、1952 (昭和27) 年に旧京橋駅構内開業の「京阪スーパーマーケット」、現在の「京阪ザ・ストア」である。
 - 22) 都市型ショッピングセンター「千里大丸プラザ」の運営や、英王室御用達として知られるスーパー「ウェイトローズ」のPB商品導入など、百貨店系らしい高級路線の店舗開発を継続したが、2013年に親会社がJ. フロントリテイリング (大丸松坂屋) からイオングループに移り、子会社の光洋が大阪府内は高級路線から標準価格志向の売場に転換した。しかし、千里ニュータウン内の千里中央店、津雲台店と、新香里の香里ヶ丘店のみは「ピーコックストア」の名称を現在も残している。
 - 23) 伊東 (1978 a) は市街化連担地区、衛星都市域、外縁部の3地帯、鉄道沿線別のセクター別分析から、衣料スーパー、総合スーパー、SC型 (大規模駐車場、テナント部門をもつショッピングセンター) への展開を大都市圏で位置づけたが、この分類ではここは総合スーパーの範疇にあたる。また伊東 (1977 b) はスーパーの全国展開を概観した先駆的業績で、第I期 (昭和34年以前)、第II期 (昭和35~39年)、第III期 (昭和40~44年)、第IV期 (昭和45~47年)、第V期 (昭和48年以降) に区分している。香里団地の「ピーコックストア」はまさに第II期の最初に生まれた食料品を中心とするスーパーマーケ

ットであった。その4年後に香里小学校の5年生に転入してきた私にとっては、これまで見たこともないまぶしい存在であった。

- 24) 松田道雄（1908-1998）は京都大学医学部出身の小児科医・育児評論家。大学時代からマルクス主義運動に参加し、久野収、末川博、田中美知太郎、桑原武夫、野間宏らの知遇を得る。京都大学人文科学研究所の「革命の比較研究」に参加し、多田道太郎、樋口謹一などとも関係が深かった。『私は赤ちゃん』（1960）、『育児の百科』（1967）はベストセラーとなり、進歩主義的文化人のひとり目とされた。
- 25) 団地開設当初は地区センターにあたるピーコックストアのほぼ独占状態であったが、10年後には団地内に以下のような商業施設ができ、食料品、日用品のほか日常サービスを提供した。いずれも徒歩圏でいける近隣センター的な施設と公設市場である（「香里めざまし新聞」第97号、1970年8月25日付）。コーキューセンター、Cセンター、DSセンター、Bセンター、香里ヶ丘公設市場、A地区商店会。日本初の郊外型大型商業施設といわれるダイエー香里店ができるのが1968年（第1表参照）で、それまでは団地住民は枚方市駅の京街道の岡本町の商店街や、京阪に乗って所要約30分の千林商店街（大阪市旭区）がまとめ買いの場所であった。
- 26) 1934年生まれ。日本銀行員を経て、枚方市議会議員6期、大阪府会議員3期を務め、新日本婦人の会枚方支部事務局長を歴任。
- 27) 卒論は自然に対する人間の開発行為が社会体制に違いでどう異なるかをまとめ、TVAをテーマとした。ロシア語を駆使して、小学校教員になってのちに、「水山先生のお力添えで58（昭和33）年の第26回人文地理学会において「カザフ共和国の産業配置について」と題し15分の発表をした。小学校の教員が学会で初めてソビエト関係を発表するので注目されていたそうだが、私は必死で汗をかきかきの大仕事であった。ほかに雑誌『地理』第6巻5号（1961）に「ソビエト経済行政地区と現状」の小論文の寄稿や、『経済地理学年報』への寄稿、『京学大地理研報告』にロシア語の地理学文献翻訳など、じっさいには地理学とのかかわりが極めて深かった。また京都一中時代の教員としては、のちに奈良女大学、奈良大学教授となる辻田右左男（辻田、2018）氏にも感銘を受けたという。（家高、2006：252-256）
- 28) 1973年には日蓮仏法を信仰する宗教法人創価学会の会長の池田大作によって、交野市の山麓には創価中・高等学校が設立されている。
- 29) 2019年5月1日現在の香里団地内の小学校の生徒数は以下の通りである。香里小学校727人（536人）、開成小学校514人（305人）、五常小学校497人（468人）、なお（ ）は2003年の生徒数である。団地内にある開成小学校区は建替高層化による人口増加、香里小学校区は旧公務員宿舍、新香里病院、財務相用地などでの戸建て住宅、マンション群などによる学齢期児童の人口増加である。
- 30) 20年以上前の調査になるが、日本の三大都市圏のニュータウンの中で千里ニュータウンは最も住みやすく愛着度も高いという住民の評価がある（福原、1998：82-90）。この評価は現在でも変わらず、豊中市域では住み替えや流入も多く、関西のニュータウンでは唯一人口増加傾向にある。大阪「キタ」への交通の便の良さも大きな要因である。香里団地も大阪へのアクセスでは劣るものの、多様な住戸による人口流動の可能性は大きい。

文献

- 家高憲三(2006).『枚方に住んで働き 闘って-住みよい街・枚方をつくりあげた民運動と行政の記録-そして 自伝-』私家版.
- 石橋進一(2014). 家高憲三と枚方市立図書館, 図書館界, **65**(6), 324-329.
- 伊東 理(1978 a). 「わが国におけるスーパーの発展過程」, 日本都市学会年報, **12**, 177-190.
- 伊東 理(1978 b). 大都市圏におけるスーパーの展開と立地-京阪神大都市圏の場合-, 人文地理, **30**(6), 8, 481-501.
- 岡部泰廣(1979). 門真市における住宅地域の特性, 人文地理, **31**(4), 80-89.
- 岡田一郎(2016).『革新自治体 熱狂と挫折に何を学ぶか』中公新書.
- 片木 篤編(2017).『私鉄郊外の誕生』柏書房.

- 香川貴志(2011). 幼少期の体験と身近な地域の観察から芽生えた住宅研究. 阿部和俊編『日本の都市地理学 50年』古今書院.
- 金子 淳(2011). 多摩ニュータウンという暮らしの実験, 国立歴史民俗博物館研究報告, **171**, 65-81.
- 籠谷次郎(1978). 『近代枚方の教育と文化』枚方市.
- 北崎豊二(1983). 枚方市. 「角川日本地名大辞典」編集委員会・竹内理三編『角川日本地名大辞典 27 大阪府』角川書店.
- 京都大学文学部地理学教室(1965). 『大都市近郊の変貌』柳原書店.
- 小池高史(2017). 『「団地族」のいま－高齢化・孤立・自治会－』書肆クラルテ.
- 小林 博(1959). 枚方市域の都市化について, 立命館文学, **166**, 16-33.
- 櫻井敬夫(1996). 高田, まんだ, **66**, 38-39, 10-19.
- 櫻井敬夫編(2000). 座談 北河内・懐かしきわが青春の故郷, まんだ, **70**.
- 實 清隆(1974). 都市スプロールの社会経済的構造－大阪市近郊寝屋川市の例－, 経済地理学年報, **20**(1), 34-60.
- 市長公室市史編さん室編(1968). 『市制二十年のあゆみ－市制施行 20年周年記念－』枚方市役所.
- 住宅・都市整備公団 10年史刊行事務局編集, 住宅・都市整備公団関西支社編(1985). 『豊かな都市とすまいを求めて: 住宅・都市整備公団 10年のあゆみ』住宅・都市整備公団関西支社.
- 吹田市立博物館・公益社団法人多摩市文化振興財団企画編集(2018). 『ニュータウン誕生－千里&多摩ニュータウン見る都市計画と人々－(吹田版)』吹田市立博物館.
- 鈴木博之(1999). 『都市へ〈日本の近代10〉』中央公論新社.
- 瀬川芳則・西田敏秀・馬場隆弘・常松隆嗣・東秀幸(2013). 『枚方の歴史』松籟社.
- 高谷好一・市原実(1961). 枚方丘陵の第四紀層: とくに新香里層・枚方層にみられる気候変化について, 地質学雑誌, **67**(793), 584-592.
- 辻 文男(1966). 淀川流域低地の宅地化と洪水対策. 人文地理, **18**(4), 47-72.
- 辻田右左男(2018). 地理学 50年. 稲垣真美・熊谷かおり編著: 『京都一中百五十周年記念 われら自由の学び舎に育ち』ミネルヴァ書房.
- 中島三佳監修(2017). 『写真集 枚方の昭和』樹林社.
- 西山研究室(1957). 香里団地計画書, 西山記念文庫 (資料 ID: 256).
- 西山卯三(1983). 『戦争と住宅 (生活空間の探究・下)』勁草書房.
- 日本住宅公団(1975). 『日本住宅公団 20年史』日本住宅公団.
- 日本住宅公団大阪支所(1962). 香里団地の開発について, 空気調和・衛生工学, **36**(2), 1-29.
- 野間晴雄(2006). 菊に寄せて, 千里地理通信 (関西大学地理学研究会会報), **54**, 1-2.
- 橋爪伸也(2000). 香里園/枚方－京阪電鉄の郊外開発－鬼門を神域で鎮める－. 片木 篤・藤谷陽悦・角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』, 鹿島出版会, 299-314.
- 原 武史(2012 a). 『団地の空間政治学』NHK 出版.
- 原 武史(2012 b). 『レッドアローとスターハウス－もうひとつの戦後思想史－』新潮社.
- 原田陽子・馬場麻衣(2008). 周辺地域との関係性からみた郊外住宅団地の再構築に関する研究, 住宅総合研究山論文集 2008 年版, 83-94.
- 原田陽子(2009). 香里団地と周辺地域における空間特性と団地周辺居住者の住環境評価と居住実態－団地とその周辺地域との関係性の再構築に関する研究－, 日本建築学会計画論文集, **74** (第 610 号) 1339-1357.
- 久井英輔(2017). 団地と社会教育・再考－高度成長期における都市住民の連帯をめぐる議論の一側面－, 広島大学大学院教育研究科紀要 (第三部), **66**, 21-30.
- 枚方市企画部企画調査室(1987). 『枚方風土記』枚方市.
- 枚方市市民情報課(1998). 『写真集 枚方市 50年』枚方市.
- 枚方市史編纂委員会編(1980). 『枚方市史 第四巻』枚方市.

- 枚方市史編纂委員会編(1984).『枚方市史 第五卷』枚方市.
- 枚方市史編纂委員会編(1977).『枚方市史 第十一卷(史料Ⅳ)』枚方市.
- 枚方市史編纂委員会編(1995).『枚方市史 別巻』枚方市.
- 枚方市史編纂委員会(2006).『楽しく学ぶ枚方の歴史』枚方市教育委員会.
- 枚方市史編纂委員会編(2014).『新版 郷土枚方市の歴史』枚方市教育委員会.
- 福原正弘(1998).『ニュータウンは今-40年目の夢と現実-』東京新聞出版局.
- 藤井 正(1983). 京阪神大都市圏における小売商業機能の立地変動-大都市圏の構造変化の一局面-, 人文地理 35(3), 210-232.
- 増永理彦(2012).『UR 団地の公的な再生と活用』, クリエイツかもがわ.
- 水内俊雄(1996). 大阪大都市圏における戦前期開発の郊外住宅地の分布とその特質. 大阪市立大学地理学教室編『アジアと大阪』古今書院, 48-79.
- 宮崎隆志(2005).「枚方テーゼ」と市民の自立」社会教育研究, 23, 19-36.
- 森井貞雄(2007). 香里団地以前, 大阪府文化財研究, 30, 145-157.
- 諸田達男追悼集編集委員会(1997).『葉は落ちてもやがて緑はぐくむ-諸田達男追悼集』せせらぎ出版.
- 諸田達男(1964). 団地での経験-特集・根拠地の思想, 思想の科学. 第5次(23), 48-53.
- 諸田達男(1965). 特集 団地保育所のさまざま 文化会議の保育所づくり, 保育の友, 13(6), 1-12.
- 和田 悠(2012). 香里ヶ丘文化会議による地域社会づくり-1960年代前半の団地における「市民」と市民運動, 社会文化研究, 15, 63-88.
- 和田 悠(2015). 大阪府枚方市香里団地を中心とした幼稚園運動と女性の主体形成-1960年代後半の局面に焦点をあてて-, 立教大学教育学科研究年報, 58, 95-105.
- 和田康由・寺内 信(1997). 戦前期における土地会社の住宅地経営-関西土地開発会社の場合-, 日本建築学会計画系論文集, 499, 155-164.
- 和田蕉因(1994). 香里園開発物語①, まんだ, 53, 2-5.
- 和田蕉因(1995). 香里園開発物語②, まんだ, 54, 2-5.
- 和田蕉因(1995). 香里園開発物語③, まんだ, 55, 2-6.

Eighty Years' Experience and History of Hirakata City, Osaka, Since 1938
with Special Reference to Kori-Danchi and its Neighboring Areas :
My Memories and Sentiments

NOMA Haruo*

Hirakata City (population ca. 400,000) is a typical satellite city 20 km from Osaka City. Before WWII, a weapons manufacturing complex occupied a vast hilly area of Hirakata City, and many laborers were employed there. In the second half of the 1950s, the Japan Federation Housing Corporation began a large-scale housing development. In this connection, Kori-Danchi was born on the hill as the first trial in the Kansai Region. The residents of Kori-Danchi are mostly white-collar nuclear families of similar levels of education. Though a minority, double-income families played an important role in community activities, child care, and the movement to establish kindergartens.

While the local government was swamped with primary and secondary school construction because of drastic population increase, democratic and reformist municipal leaders influenced local government policies, occasionally overdoing, as well. In the 1990s, small and obsolete housing complexes were rebuilt and sold to private sectors. An influx of new nuclear families and elderly (and more traditional) residents formed a new type of community. The author chronicles an eighty-year local history, accompanied by my own memories and sentiments.

Key words : satellite city, weapons manufacturing, Japan Federation Housing Corporation,
Kori-Danchi, reformist political party, Hirakata City

*Faculty of Letters, Kansai University E-mail : noma@kansai-u.ac.jp